

改訂レッドリスト  
付属説明資料

貝類

平成 22 年 3 月

環境省自然環境局野生生物課

## はじめに

「付属説明資料」は、平成18年12月及び平成19年8月に公表された改訂版レッドリストにおいて新規に掲載された種を基本に、それらの生息状況等を簡潔に解説したもので、本冊子は、その「貝類」版です。

すでに刊行されているレッドデータブックと合わせて、絶滅のおそれのある野生生物の保護を進めていくための基礎的な資料として広く活用されることが望まれます。

改訂レッドリストの詳細については、以下のwebページを参照してください。

<http://www.env.go.jp/press/press.php?serial=7849>

<http://www.env.go.jp/press/press.php?serial=8648>

<http://www.env.go.jp/press/press.php?serial=8886>

## 掲載種と解説内容

平成19年8月3日に公表された貝類改訂レッドリストに掲載された754種・亜種のなかから、同リストにおいて新規に掲載された236種・亜種について、以下の内容を簡潔に解説しました。なお、記載内容は原則としてレッドリスト公表時のものです。

- カテゴリー区分（新ランク及び[新規掲載]の表記）
- 目名、科名
- 和名
- 学名、記載者名、記載年
- 生息状況等、以下の項目を簡潔に記載  
日本における固有性／形態と特徴／分布の概要／  
生息地の現況とその動向／存続を脅かしている原因とその種の危機の状況／保護対策  
（存続を脅かしている原因は、できる限り記述の統一を図るために、原則として別表に挙げたタイプ区分を用いコードを付記した。）
- 参考文献

### ■原因のタイプ区分表

森林伐採 11	湖沼開発 12	河川開発 13
海岸開発 14	湿地開発 15	草地開発 16
石灰採掘 17	ゴルフ場 21	スキー場 22

土地造成 23	道路工事 24	ダム建設 25
水質汚濁 31	農薬汚染 32	
園芸採取・観賞用捕獲・狩猟 41	薬用採取 42	
その他不法採集など 43	踏みつけ 51	
捕食者侵入 52	管理放棄 53	
遷移進行・植生変化 54	火山噴火 55	
帰化競合 56	異種交雑・放流 57	
産地局限 61	近交化進行 62	その他 71
不明 99		

## 執筆

執筆はつぎの方々にお願ひし、執筆者名を種ごとの記載の末尾に明記しました。

上島 励（東京大学大学院理学系研究科）

木村昭一（愛知県環境審議会）

木村妙子（三重大学大学院生物資源学研究科）

近藤高貴（大阪教育大学教育学部）

佐々木猛智（東京大学総合研究博物館）

中井克樹（滋賀県立琵琶湖博物館）

増田 修（姫路市立水族館）

湊 宏（日本貝類学会）

## 今後の対応

環境省では、レッドリストや本冊子について広く普及を図ることで、絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存への国民の理解を深めるとともに、関係省庁や地方公共団体等に配布することにより各種計画における配慮等を促す予定です。

また、レッドリストの掲載種の中で特に保護の優先度が高い種については、さらに生息状況等に関する詳細な調査の実施等により情報収集を行い、その結果及び生息・生育地域の自然的・社会的状況に応じて「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」に基づく国内希少野生動植物種に指定する等、必要な保護措置を検討します。

なお、レッドリストは、今後とも、5年ないし10年ごとに再調査と見直しを行う必要があるものと考えられます。

環境省自然環境局野生生物課

中腹足目 ムシオイガイ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## ヒョットコイトウムシオイ *Chamalycaeus nakashimai ditacaeus* Minato & Yano, 2000

日本固有亜種。鳥取県八頭町 (旧・郡家町) の2か所に分布。貝殻は小型 (殻長径 3.7mm~4.7mm)。基亜種のクビレイトウムシオイ (*C. n. nakashimai*) に比べて、頸部がより伸長すること、臍孔が体層の底螺層の張り出しによってほとんど覆われるので小さくて狭い。社寺林の林床の落ち葉堆積層に生息するが、生息密度がきわめて低いので採集圧 (41) とイノシシによる林床の攪乱 (51) によっての個体数の減少が懸念されている。

【参考文献】 74)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

中腹足目 ムシオイガイ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## タカチホムシオイ *Chamalycaeus nishii* Minato, 2005

日本固有種。九州中部 (宮崎県北部、大分県南部、熊本県中部) の石灰岩地帯に分布する。貝殻は殻長径 3.8mm~3.9mm ほどの小型種で低円錐形状、頸部の中程に弱い膨らみがある。上記の石灰岩地帯では個体数が多くはないので、自然林伐採 (11) や石灰岩採掘 (17) などをやめて、生息地の環境の保全に努める必要がある。

【参考文献】 69)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

中腹足目 ムシオイガイ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## シイバムシオイ *Chamalycaeus shiibaensis* Minato, 2005

日本固有種。宮崎県中・北部の石灰岩地帯に生息し、その分布域は狭い。貝殻は殻長径 4.4mm ほどの小型種で、殻口の二重唇がこの種の標徴である。タイプ産地は石灰岩地の小さな洞窟の入り口付近であるが、生息地がきわめて狭いので、採集圧 (41) などによる生息地の攪乱や破壊等によって、その影響が懸念される。

【参考文献】 69)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

中腹足目 トウガタカワニナ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## カントウカワニナ *Thiaridae* gen. et sp.

未記載種と考えられ、属位の所属も不明。殻は細長く殻高 10~20mm 程度と小型。幼貝層や若貝層が欠落することが多く、欠落部分が多い個体の殻の概形は円筒形となる。螺層には疣状縦肋が顕著で、体層部で 15 本前後を数える。殻底肋数は 5~9 本。殻表面は黒褐色だが付着物を除くと淡色となる。奄美大島の住用川・役内川河口部デルタのマングロープ内の干潮時に形成される浅い滞筋に生息。生息地は数か所に限られ、どれもきわめて狭い。奄美大島では森林伐採 (11) や河川開発 (13) に伴う河川環境の劣化が著しく存続が危惧される。

【参考文献】 48)

執筆者：中井克樹 (滋賀県立琵琶湖博物館)

中腹足目 フトヘナタリ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## クロヘナタリ *Cerithidea largillierti* Philippi, 1848

殻高 30mm 程度になり、殻質は薄く外唇は肥厚しない。殻表面には、間隔の狭い低い縦張肋があり、老成すると摩耗して無肋状態になりやすい。殻色はやや透明感のある黒褐色で、暗色の帯状斑がある。山口県や大分県、有明海の干潟に局所的に分布する (61)。河口やそれに付随する内湾奥部の砂泥底に生息し、干潮時にできる溜まりなどの湿潤な場所を好む。河川改修 (13) や内湾の海岸開発 (14)、土地造成 (23)、道路工事 (24)、水質汚濁 (31) を受けやすい河口や内湾干潟に生息し、絶滅が危惧される。

【参考文献】 8)、78)

執筆者：増田 修 (姫路市立水族館)

中腹足目 フトヘナタリ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## シマヘナタリ *Cerithidea ornata* A. Adams, 1855

殻高 30~35mm。螺層には等間隔に縦肋が並び、殻口の前 (底) 縁は伸長し外唇は肥厚する。殻表面は茶褐色帯によって彩色される。山口県や大分県 (周防灘沿岸) と有明海の限られた地域 (福岡県の玄界灘側は絶滅とみなされる) にのみに分布 (61) する。海外では朝鮮半島や中国に分布する。河川改修 (13) や内湾の海岸開発 (14)、土地造成 (23)、道路工事 (24)、の影響を受けやすい河口のヨシ帯に生息し、今もなお進むヨシ原の埋め立てや護岸工事の進行具合では絶滅が危惧される。

【参考文献】 8)、79)

執筆者：増田 修 (姫路市立水族館)

収柄眼目 イソアワモチ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## ヤベカワモチ *Onchidium* sp. 2

体長は約 40mm で、体は扁平。背面には細かい疣状突起が密生する。背面は暗褐色。担眼突起は 1 個で背面の中央に位置する。足は狭く、体幅の 1/2 以下。外套腹面 (両側部) は灰色で小さな黒斑が多数散在する。足裏は褐色。九州、韓国、中国の内湾の河口部 (ヨシ原) に生息する。分類学的位置については再検討が必要。本種は国内での生息地がきわめて少なく、生息に適した環境が埋め立てなど (15) によって急速に消失しているため、保全対策が必要である。

【参考文献】 9)

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

収柄眼目 イソアワモチ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## センベイアワモチ *Platevindex* sp. 2

体長は約 35mm で、体は扁平。背面には細かい疣状突起が密生する。背面は暗褐色で不規則な黒斑が散在する。背面の担眼突起は 10 以上で背面に散在する。足は狭く、体幅の 1/2 以下。腹面は白色から灰色。瀬戸内海および九州の内湾の泥干潟に生息する。本種は生息地が少ないうえに、生息に適した環境が埋め立てなど (15) によって急速に消失しており、保全対策が必要である。

【参考文献】 8)

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

原始有肺目 オカミミガイ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## コハクオカミミガイ *Auriculodes opportunatum* (Gould, 1859)

殻高約 20mm、殻は黄白色で薄質半透明。貝殻はほとんど平滑で光沢は強い。沖縄島以南の琉球列島からフィリピンの内湾域のマングローブ湿地内上部の陸上植生との境界付近の泥に埋もれた朽木の内部や下面に生息する。フィリピン産とは貝殻の形態に差異があり、分類学的な検討が必要(学名のタイプ産地は沖縄島)。分布域における生息地、個体数とも著しく少ない(61)。本種の生息場所は河口域における橋梁工事、河川改修、護岸工事によって容易に破壊されてしまう(13、15、24)。また、上流の森林伐採、農地造成(11、23)などが、河川の流量の急激な増加や赤土の大量流出を引き起こし、安定した朽木に依存する本種の個体群の消滅につながる。

【参考文献】 8)、23)、36)、46)、48)

執筆者：木村昭一(愛知県環境審議会)

原始有肺目 オカミミガイ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## カタシノミミミガイ *Cassidula crassiuscula* Mousson, 1869

殻高約 15mm。貝殻は殻皮毛をもつ殻皮で被われ、殻口外唇から殻軸部にかけて強く肥厚する。奄美大島以南熱帯太平洋に分布し、国内では奄美大島、沖縄島、石垣島の数か所で生息が確認されているにすぎない(61)。内湾域の陸上植生までよく保全されたマングローブ湿地内の石や朽木の下に生息する。生息地における個体数は比較的多い場所もあるが、各生息地の面積は小さい。生息場所は橋梁工事、河川改修、護岸工事によって容易に破壊されてしまう(13、15、24)。また、マングローブ湿地自体に改変が加えられていない場合でも、上流の森林伐採、農地造成(11、23)などが、本種の生息環境に大きな被害を与えている。

【参考文献】 8)、36)、46)、48)

執筆者：木村昭一(愛知県環境審議会)

原始有肺目 オカミミガイ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## ヒメシノミミミガイ *Cassidula paludosa nigurobrunnea* Pilsbry & Hirase, 1905

日本固有亜種として沖縄島国頭村をタイプ産地として記載されたが、原名亜種との区別は難しい。殻高約 10mm。シノミミミガイ(*C. plectrotrematoides japonica*)に近似するが、殻は細長く小型。奄美大島以南の琉球列島の内湾域の陸上植生までよく保全されたマングローブ湿地内の泥に埋もれた石や朽木の下に生息する。比較的分布域は広いが、生息地、個体数とも著しく少なく、原記載以来少数の採集記録があるにすぎない(61)。本亜種の生息場所は河口域における橋梁工事、河川改修、護岸工事によって容易に破壊されてしまう(13、15、24)。また、マングローブ湿地自体に改変が加えられていない場合でも、上流の森林伐採、農地造成(11、23)などが、本亜種の生息環境に大きな被害を与えている。

【参考文献】 8)、29)、30)、48)

執筆者：木村昭一(愛知県環境審議会)

原始有肺目 オカミミガイ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## シノミミミガイ *Cassidula plectrotrematoides japonica* Moellendorff, 1901

日本固有亜種。殻高約 13mm。奄美大島以南に分布するヒゲマキシノミミミガイ(*C. p. plectrotrematoides*)との区別は微妙で、分類学的な再検討が必要である。本亜種は、かつては東京湾以南、九州まで広く分布し(タイプ産地は長崎県)、比較的普通種とされていたが、近年ほとんど生息が確認されなくなり、神奈川、三重、佐賀、熊本の各県より各 1~2か所の生息地が確認されているにすぎない(61)。陸上植生がよく保存された内湾域の潮間帯上部の転石や石組みの間に潜んでいる。生息場所は橋梁工事、河川改修、護岸工事によって容易に破壊されてしまう(13、15、24)。また、熊本県の 1か所の生息地は周辺干潟の干拓工事によって消滅した(23)。

【参考文献】 8)、11)、13)、19)

執筆者：木村昭一(愛知県環境審議会)

原始有肺目 オカミミガイ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## ヘゴノメミミガイ *Cassidula schmackeriana* Moellendorff, 1855

殻高約 12mm。貝殻はシノミミミガイ (*C. plecotrematoides japonica*) に近似するが、より太く、ヘゴの芽胞を彷彿とさせる殻皮毛が貝殻を被っている。最近になって日本で生息が確認された種。国外では香港より詳細な生息環境の記録がある。日本産オカミミガイ科貝類中最も分布域が狭く、石垣島の 3 か所でのみ生息が確認されている (61)。内湾域のよく保全されたマングローブ湿地内の石灰岩礫の間や下面に生息する。各生息地の面積は狭く、その内の 1 か所の個体群は橋梁工事によって大きな打撃を受けた。生息環境であるマングローブ湿地は河川改修、護岸工事等によって容易に破壊されてしまう (13、15、23、24)。

【参考文献】 32)、37)、47)

執筆者：木村昭一 (愛知県環境審議会)

原始有肺目 オカミミガイ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## コウモリミミガイ *Cassidula vespertilionis* (Lesson, 1831)

殻高約 13mm。殻口外唇から殻軸部にかけて強く肥厚し、カタシノミミミガイ (*C. crassiuscula*) に似ているが、螺塔が高く、貝殻に殻皮がない特徴などから区別される。宮古島以南、熱帯太平洋に分布し、日本産本科中で最も記録例が少ない種の一つ (61)。国内では宮古島、石垣島、西表島より記録があるが、あまりに確認個体数が少ないことから偶因分布とされたこともある。確認個体数は少ないが、これら 3 島で複数年にわたって生息が確認されており、定着種であると考えられる。内湾域の陸上植生までよく保全されたマングローブ湿地内の石や朽木の下に生息し、樹木の幹に登ることもある。各生息地の面積は著しく小さく、局地的で橋梁工事、河川改修、護岸工事等によって容易に破壊されてしまう (13、15、23、24)。

【参考文献】 8)、30)、36)、46)、48)

執筆者：木村昭一 (愛知県環境審議会)

原始有肺目 オカミミガイ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## ナズミガイ *Cylindrotis quadrasi* Moellendorff, 1895

殻高約 8mm。殻は細長い円筒形で黄白色、殻表はほとんど平滑で光沢は強い。沖縄島、フィリピン、タイで記録されている。日本産本科中最も分布域が狭い種の一つで、沖縄島北部の数か所でのみ生息が確認されている (61)。マングローブ湿地内上部の泥に深く埋もれた石や朽木の下および内部に生息する。生息地の面積は非常に小さく、個体数も少ない。本種の生息場所は橋梁工事、河川改修、護岸工事によって容易に破壊されてしまう (13、15、24)。また、マングローブ湿地自体に改変が加えられていない場合でも、上流の森林伐採、農地造成 (11、23) などが、本種の生息環境に大きな被害を与えている。

【参考文献】 7)、8)、46)、48)

執筆者：木村昭一 (愛知県環境審議会)

原始有肺目 オカミミガイ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## デンジハマシノミガイ *Detracia* sp.

殻高約 6mm。貝殻は卵形で、暗紫褐色の墨流し模様が特徴的。日本産オカミミガイ科貝類中最も分布域が狭い種の一つで、沖縄島北部の数か所でのみ生息が確認されている (61)。数種の近似種が南西諸島やオーストラリア北部までの太平洋沿岸に広く分布しているが、本種は日本固有種の可能性が高い。内湾域の陸上植生までよく保全されたマングローブ湿地内の石や朽木の下に生息する。生息地における個体数は比較的多い場所もあるが、各生息地の面積は著しく小さい。本種の生息場所は河口域における橋梁工事、河川改修、護岸工事によって容易に破壊されてしまう (13、15、24)。

【参考文献】 8)、48)

執筆者：木村昭一 (愛知県環境審議会)



原始有肺目 オカミミガイ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## カドバリコミミガイ *Laemodonta bella* (H. & A. Adams, 1855)

殻高約5mm、螺層には太く張り出した強い螺肋が発達し、階段状になり、本科としては特異な貝殻の形状を呈する。奄美大島以南熱帯インド太平洋に分布する。琉球列島で海岸に打ち上げられた貝殻の記録例が少数あるが、生きた貝が確認された例はほとんどない(61)。外洋に面した岩礁海岸の飛沫帯付近の岩の割れ目の奥深くに生息し、ほとんど外に出ることはない。海岸の護岸工事等(14、23)で生息地が破壊される危険が高い。本種の確認例の少なさは、生息環境の特殊さだけでなく生息数の少なさにも起因すると考えられる。

【参考文献】 48)、96)

執筆者：木村昭一 (愛知県環境審議会)

原始有肺目 オカミミガイ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## クイロコミミガイ *Laemodonta siamensis* (Morelet, 1875)

殻高6~8mm、殻は太い紡錘形で表面に細かい螺肋がある。色は赤褐色で時に白色個体が見られる。日本および韓国、台湾、東南アジアに分布し、国内では伊勢湾、瀬戸内海、博多湾、九州西岸、奄美大島、琉球諸島に分布する。三河湾では分布が見られず、伊勢湾が分布東限である。日本本土では内湾河口域の泥干潟のヨシ原湿地内、南西諸島ではマングローブ周辺や後背湿地の朽ち木や転石下に生息するが、とくに本土では産地や生息数は非常に少ない(61)。護岸工事や埋め立てによる生息地の破壊(14、15、23、24)により、著しく減少したと考えられる。

【参考文献】 29)、31)

執筆者：木村妙子 (三重大学大学院生物資源学研究科)

原始有肺目 オカミミガイ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## コベソコミミガイ(マルコミミガイ) *Laemodonta* sp.

殻高約5mm。貝殻は白色で太い卵形。日本産オカミミガイ科貝類中で最も記録例が少ない種の一つ(61)。トカラ列島、沖縄島、宮古島、石垣島より記録があるが、生息地、個体数とも非常に少ない。外洋に面した内湾域の転石地の飛沫帯付近の深く埋もれた石の間や下面に生息する。近年宮古島1か所、石垣島1か所の生息地が道路造成、橋梁工事によって消滅した。生息環境は河川改修、護岸工事等によって容易に破壊されてしまう(13、15、23、24)。

【参考文献】 8)、43)、48)

執筆者：木村昭一 (愛知県環境審議会)

原始有肺目 オカミミガイ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## アツクチハマシイノミガイ *Melampus cristalus* Pfeiffer, 1855

殻高約10mm、殻質は厚く、卵形。螺塔は低く殻頂は小さく乳頭状、殻口内唇は肥厚する。宮古島以南、熱帯太平洋に分布する。日本産オカミミガイ科貝類中で最も記録例が少なく(61)、偶因分布とされたこともあるが、複数年にわたって生息が確認されており、定着種であると考えられる。宮古島より初めて生息環境が報告され、石垣島、西表島にも分布する。外洋に面した岩礁海岸の飛沫帯の転石下やマングローブ林に隣接する転石地の石の下に生息するが、生息地、個体数とも著しく少ない。宮古島の生息地の1か所は、埋め立てにより消滅した(14、15、23、24)。

【参考文献】 30)、48)

執筆者：木村昭一 (愛知県環境審議会)

原始有肺目 オカミミガイ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## ウルシヌリハマシイノミガイ *Melampus nucleus* Martens, 1865

殻高約 10mm、殻はやや太い卵形。ハマシイノミガイ (*M. nuxeastaneus*) に近似するが、殻口外唇の歯状突起は細かく数が多い。沖縄島以南、東南アジアの内湾域のマングローブ湿地内上部の陸上植生との境界付近の泥に埋もれた石の下や隙間に生息する。生息地、個体数とも著しく少ない (61)。本種の生息場所は河口域における橋梁工事、河川改修、護岸工事によって容易に破壊されてしまう (13、15、24)。また、マングローブ湿地自体に改変が加えられていない場合でも、上流の森林伐採、農地造成 (11、23) などが、本種の生息環境に大きな被害を与えている。

【参考文献】 8)、30)、46)、48)

執筆者：木村昭一 (愛知県環境審議会)

原始有肺目 オカミミガイ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## トリコハマシイノミガイ *Melampus phaeostylus* Kobelt, 1898

殻高約 8mm、殻はやや太い卵形。体層には多数の細い螺肋があり、螺塔には鱗片状の殻皮が発達する点などキヌメハマシイノミガイ (*M. sulculosus*) に近似するが、殻が小さく、丸みが強い。キヌメハマシイノミガイの幼貝との区別は難しい場合がある。奄美大島以南の琉球列島、中国南部の内湾域のマングローブ湿地内上部の陸上植生との境界付近の泥に埋もれた石や朽木の下に生息する。生息地、個体数とも著しく少ない (61)。本種の生息場所は河口域における橋梁工事、河川改修、護岸工事によって容易に破壊されてしまう (13、15、24)。また、マングローブ湿地自体に改変が加えられていない場合でも、上流の森林伐採、農地造成 (11、23) などが、本種の生息環境に大きな被害を与えている。

【参考文献】 8)、30)、46)、48)

執筆者：木村昭一 (愛知県環境審議会)

原始有肺目 オカミミガイ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## ニハタズミハマシイノミガイ *Melampus sculptus* Pfeiffer, 1855

殻高約 10mm、螺塔は高く、殻頂部から体層にかけて強い縦肋が多数発達し、貝殻の色彩は黒褐色と黄白色の 2 型がある。沖縄島以南の琉球列島から熱帯太平洋の内湾域のマングローブ湿地内上部の陸上植生との境界付近の石、朽木、落葉の下に生息する。生息地、個体数とも著しく少なく、採集記録は非常に少ない (61)。本種の生息場所は河口域における橋梁工事、河川改修、護岸工事によって容易に破壊されてしまう (13、15、24)。また、マングローブ湿地自体に改変が加えられていない場合でも、上流の森林伐採、農地造成 (11、23) などが、本種の生息環境に大きな被害を与えている。

【参考文献】 8)、19)、30)、48)

執筆者：木村昭一 (愛知県環境審議会)

原始有肺目 オカミミガイ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## キヌメハマシイノミガイ *Melampus sulculosus* Martens, 1865

殻高約 15mm、殻は細長い卵形。体層には多数の細い螺肋があり、螺塔には鱗片状の殻皮が発達する。琉球列島以南、東南アジアの内湾域のマングローブ湿地内上部の陸上植生との境界付近の泥に埋もれた石や朽木の下に生息する。生息地、個体数とも著しく少ない (61)。本種の生息場所は河口域における橋梁工事、河川改修、護岸工事によって容易に破壊されてしまう (13、15、23、24)。また、マングローブ湿地自体に改変が加えられていない場合でも、上流の森林伐採、農地造成 (11、23) などが、河川の流量の急激な増加や赤土の大量流出を引き起こし、本種の生息環境に大きな被害を与えている。

【参考文献】 8)、19)、46)、48)

執筆者：木村昭一 (愛知県環境審議会)



原始有肺目 オカミミガイ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## オウトウハマシイノミガイ *Melampus* sp.

殻高約 8mm。殻は細長い卵形。体層には多数の螺肋があり、ヌノメハマシイノミガイ (*M. granifer*) と近似しているが、体層の中央部には螺肋がない点で区別される。沖縄島以南の琉球列島の内湾域のマングローブ湿地内上部の泥に埋もれた石や朽木の下に生息する。生息地、個体数とも著しく少ない (61)。沖縄島、宮古島の各 1 か所の生息地が近年消滅した。本種の生息場所は河口域における橋梁工事、河川改修、護岸工事等によって容易に破壊されてしまう (13、15、23、24)。また、マングローブ湿地自体に改変が加えられていない場合でも、上流の森林伐採、農地造成 (11、23) などが、本種の生息環境に大きな被害を与えている。

【参考文献】 8)、28)、46)、48)

執筆者：木村昭一 (愛知県環境審議会)

原始有肺目 オカミミガイ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## オキヒラシイノミガイ *Pythia cecillei* (Philippi, 1847)

殻高約 25mm、背腹方向に偏圧された卵形。殻口に大きな歯状突起が発達する。日本産同属 4 種は近似している。過去の記録には誤同定と思われる混乱が少なくない。本種は日本産オカミミガイ科貝類中最も分布域が狭い種の一つで、山口、福岡、佐賀、長崎、熊本の各県で採集記録があるにすぎない (国外では中国南部に分布するとされ、タイプ産地は中国) (61)。奄美大島以南の琉球列島からも記録があるが、誤同定と考えられる。本種は内湾のヨシ原湿地の陸側に隣接する陸上植生内に生息している。各生息地の面積は非常に小さく、個体数も少ない。福岡県では絶滅したと考えられる。生息場所は橋梁工事、河川改修、護岸工事等によって容易に破壊されてしまう (13、15、23、24)。

【参考文献】 8)、19)、20)、46)

執筆者：木村昭一 (愛知県環境審議会)

基眼目 ウミマイマイ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## ウミマイマイ *Salinator takii* (Kuroda, 1928)

殻径は約 7mm で、殻は球形に近く、臍孔は狭く開く。殻は灰色から褐色で、しばしば複数の色帯が出る。有肺類としては例外的に蓋を有し、蓋は半円形で少旋型。韓国および中国に産する近似種との関係は再検討が必要。有明海沿岸の泥干潟に生息するが、本種の生息環境は埋め立てや干拓により減少しているため (15、23)、保全対策が必要である。

【参考文献】 8)、10)

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ニッポンマイマイ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## ウロコマイマイ *Satsuma lepidophora* Minato, 2006

日本固有種。殻は本属の中では中型 (殻高 12mm、殻径 17.5mm)、低円錐形状、薄質で半透明 (軟体部の外套膜が透けて見える)。殻表に微細な鱗片状突起を具えるが、成貝になるとそれは多く脱落する。体層に弱い角があり、色帯を欠く。臍孔は小さくて狭い。三重県南部の紀北町長島の沖合・大島にのみ生息が確認されているが、その生息域がきわめて狭く (61)、かつ個体数が少ない。

【参考文献】 70)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

柄眼目 オナジマイマイ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## イソムラマイマイ *Aegista stenomphala* Minato, 2004

日本固有種。香川県中・北部の2～3か所しか生息地が確認されていない。貝殻は低円錐形状、小型（殻径約7mm）。新鮮な個体では殻表が微細な毛状殻皮に覆われる。夏季には低木に登り、葉裏に付着する。生息域が狭いので、採集圧等（41）による個体数の減少が危惧される。まず、その生息環境の保全が大事と考える。

【参考文献】 68)

執筆者：湊 宏（日本貝類学会）

イシガイ目 カワシンジュガイ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## コガタカワシンジュガイ *Margaritifera togakushiensis* Kondo & Kobayashi, 2005

日本固有種。殻は長卵円形で、殻長は通常100mmを超えない。北海道と本州に分布し、夏季の水温が20℃を超えない、清冽な水が緩やかに流れる水域の礫～泥底に生息する。幼生は円形で、殻長0.07mmと小さく、イワナやアメマスに寄生する。これら魚種が堰などによる遡上障害や釣りなどの漁獲によって減少し、世代交代が困難になっている。また、河川改修（13）による生息場所の破壊や、森林伐採（11）による土砂の流入と水温の上昇によって生息が脅かされている。タイプ産地の個体群は、長野市指定の天然記念物である。

【参考文献】 35)

執筆者：近藤高貴（大阪教育大学教育学部）

原始腹足目 アマオブネガイ科

VU (絶滅危惧 II 類) [新規掲載]

## ヒロクチカノコガイ *Neritina cornucopia* (Benson, 1836)

殻径20mm。螺塔が低く殻は横長である。若い個体は黄褐色であるが、成熟個体では黒褐色の厚い殻皮を被る。殻には三角斑やジグザク模様をもつ個体が多い。殻口は灰白色。成熟個体では殻口が肥厚し、とくに内唇が厚く広がる。伊勢湾以南に分布し、内湾の湾奥部の河口付近の泥質干潟に生息する。日本本土では、かつて知られていた産地の多くが消滅しており、アマオブネガイ科の中では保全の重要度が最も高い。琉球列島に生息する個体群は分類学的に再検討が必要である。

【参考文献】 21)

執筆者：佐々木猛智（東京大学総合研究博物館）

原始腹足目 アマオブネガイ科

VU (絶滅危惧 II 類) [新規掲載]

## オカイシマキガイ *Neritodryas subsulcata* (Sowerby, 1883)

殻径30mm前後。殻の表面には多数の明瞭な条線がある。色彩は成貝では一様に黒褐色であるが、幼若個体には斑紋がある。殻口内は純白で殻表とは対照的。蓋は全面が黒い。八重山諸島以南の熱帯域に分布する。小規模な河川の上流部に生息し、夜行性で、日中は川岸の岩の隙間や礫の下に潜む。人工的な基質の表面には生息できないため、河川改修（13）等により影響を受ける可能性がある。国内の健全な産地は限られている。

【参考文献】 —

執筆者：佐々木猛智（東京大学総合研究博物館）

原始腹足目 ゴマオカタニシ科

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

## ベニゴマオカタニシ *Georissa shikokuensis* Amano, 1939

日本固有種。殻長約2mmで螺塔は高く円錐形。ゴマオカタニシ (*G. japonica*) に似るが殻表は滑らかで赤色は濃い。本州、四国、九州の石灰岩地に生息し、石灰岩の表面や石の下に付着する。個々の産地では多産することが多いが、生息地は限られた場所に限定される。石灰岩の採掘 (17) や森林の乾燥化などにより生息状況は悪化している。また、分布域は不連続であるため、地域集団ごとの保全が必要となる可能性もある。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

中腹足目 ワカウラツボ科

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

## マンガルツボ *Iravadia quadrasi* (Bottger, 1902)

殻高約3mmと小型、長卵形。殻は厚く、堅固。殻表は強い螺肋と縦肋が交錯し結節状になる。奄美大島以南から東南アジアのマングローブ湿地内および周辺の深く泥に埋もれた石や朽木の下面に集まって生息する。生息環境が特殊であるため、生息地は限定される (61)。本種の生息場所は海岸の護岸工事等 (14、23)、橋梁工事、河川改修、護岸工事等の影響を受けやすい (13、15、24)。

【参考文献】 8)、48)

執筆者：木村昭一 (愛知県環境審議会)

中腹足目 ワカウラツボ科

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

## ワカウラツボ *Iravadia sakaguchii* (Kuroda & Habe, 1954)

日本固有種。殻高5~6mmと小型で長卵形。殻は厚く、臍孔はない。蓋は革質で薄い。タイプ産地の和歌山県和歌浦では、都市開発による水質汚濁などのため絶滅したとされ、かつ新産地も見つからなかったため、長らく幻の貝とされてきた。1980年代以降、三河湾、伊勢湾、瀬戸内海、有明海から生息が確認され、1999年には和歌浦からも再確認された。汽水域の泥干潟の中潮位付近にある半ば埋もれた石や朽ち木の下面に生息する。生息環境が特殊であるため、護岸工事や埋め立てによる生息地の破壊 (14, 15, 23, 24) や水質汚濁 (31) により、著しく減少したと考えられる。

【参考文献】 27)、33)

執筆者：木村妙子 (三重大学大学院生物資源学研究所)

中腹足目 カワザンショウガイ科

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

## オオクリイロカワザンショウ *Angustassiminea kyushuensis* S. & T. Habe, 1983

殻高8~9.5mmになり、殻質は厚く、臍孔はきわめて狭く浅い。殻表面は赤みのある黄褐色で、鈍い光沢がある。殻表は通常、成長脈に添った筋状の侵食や虫食い状の侵食がある。九州北部の有明奥部に流入する限られた河口に分布し、ヨシ帯や周辺の岩礫帯に生息する。河川改修 (13) や内湾の海岸開発 (14)、土地造成 (23)、道路工事 (24)、水質汚濁 (31) を受けやすい河口や内湾干潟に生息し、加えて産地が限られている (61) ので、開発状況では絶滅が危惧される。

【参考文献】 8)

執筆者：増田 修 (姫路市立水族館)

中腹足目 カワザンショウガイ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

## ヨシダカワザンショウ *Angustassiminea yoshidayukioi* (Kuroda, 1959)

殻高 3.3mm 前後の微小種。螺層の膨らみは強く外観は丸みがある。殻は透明感のある薄質で、狭い臍孔がある。殻色は強い光沢を有する黄褐色から赤褐色で、臍域はやや淡色になる。東京湾から九州にかけての河口に分布する。主にヨシ帯の礫下や漂着物の下などに生息し、産地によっては多産することもあるが、既知産地でも再発見できない場所が少なくない。河川改修 (13)、内湾の海岸開発 (14)、土地造成 (23)、道路工事 (24)、水質汚濁 (31) を受けやすい河口周辺に生息しているので、現状の開発状況では、より希少性が高くなりうる。

【参考文献】 8)、31)、48)

執筆者：増田 修 (姫路市立水族館)

中腹足目 カワザンショウガイ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

## カワタレカワザンショウ *Assiminidae* gen. et sp.

日本固有種。福田 (1996) で紹介された属不明の未記載種である。殻径 1.8mm、殻高 1mm ほどの微小種。殻が他種に比べて低平であり、他のカワザンショウガイ科諸種と形態を異にする。伊勢湾や瀬戸内海西部、四国西部の内湾や河口の干潟で確認されている。高潮帯の埋もれ石の下に生息する。生息地の河口 (13) や内湾の改修工事 (14)、干潟の土地造成 (23)、水質汚濁 (31) など、干潟環境の開発が加わっており、既知産地も元々少なく (61) 希産である。

【参考文献】 8)、31)

執筆者：増田 修 (姫路市立水族館)

中腹足目 カワザンショウガイ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

## ヤマモトミジンオカチグサガイ *Paludinella yamamotonis* Kuroda, MS.

殻高 2.5mm であり、カワザンショウガイ科の中では微小である。殻は白色透明で、軟体が透けて見える。海岸の飛沫帯の礫下や海浜植物の根元などの礫下に潜んでいる。和歌山県南部の限られた海岸でのみ知られ、個体密度がきわめて低い。産地が局限 (61) していること、飛沫帯という陸に近い所が生息地であることなどから、今後、海岸開発 (14) や道路工事 (24) の影響を受けやすい。同種またはきわめて近似な貝は四国や九州の太平洋岸、鹿児島県の宇治群島や甕島などで見つかった。

【参考文献】 —

執筆者：増田 修 (姫路市立水族館)

中腹足目 カワザンショウガイ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

## アズキカワザンショウ *Pseudomphala latericea* (Habe, 1943)

本科では大きく、殻高 10mm 程度になる。太い紡錘形で、体層は大きく、殻底は他種に比べて伸長する。縫合は浅く、直下は淡色に色抜けする。殻表面は朱褐色から赤褐色で、滑らかで鈍い光沢がある。有明海北部の河口やその周辺の干潟の泥上やヨシ帯に生息する。河川改修 (13) や内湾の海岸開発 (14)、土地造成 (23)、道路工事 (24)、水質汚濁 (31) を受けやすい河口や内湾干潟に生息し、規模の小さな生息地であるヨシ原や干潟は、容易に道路工事などで消失している。

【参考文献】 8)

執筆者：増田 修 (姫路市立水族館)

中腹足目 トウガタカワニナ科

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

## ネジヒダカワニナ *Sermyla riqueti* (Gateloup, 1840)

殻高 15mm 程度の紡錘形で殻頂はあまり脱落しない。顕著な縦肋は曲線を描く殻口縁と平行に波打つ。螺肋は殻底のものが強く、6本前後。部殻色は暗褐色から黄褐色で、全体に細かな暗色斑が見られる。鹿児島県国分市、指宿市、奄美大島以南の南西諸島に分布する。トウガタカワニナ科の中では最も海に近くに見られ、内湾やマングローブ周辺の湧水の湧出箇所に生息するが、場所によっては、海とは隔てられた水田水路に生息していることもある。八重山諸島以外では、埋め立て (14) 等により生息が脅かされている。

【参考文献】 48)

執筆者：中井克樹 (滋賀県立琵琶湖博物館)

中腹足目 トウガタカワニナ科

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

## タケノコカワニナ *Stenomelania rufescens* (Martens, 1860)

殻高 50mm 程度に達し、カワニナ (*Semisulcospira libertina*) よりもやや細長い概形をしている。殻表は暗褐色から褐色で、大型個体では殻頂部が侵食、脱落する傾向がある。縦肋はなく、螺肋も殻底部に6本前後を数えるほかはきわめて弱い。トウガタカワニナ科では最も北に分布し、伊豆半島以南の本州太平洋・瀬戸内海沿岸、四国、九州から確認されている。河川の汽水域の泥底を主な生息環境とするが、実際の生息河川は限られる。河川の下流域や河口域に生息するため、河川開発 (12) や海岸開発 (14) 等の影響を受けやすく、県レベルでは絶滅したところがあるほか、各地で絶滅の危険性が指摘されている。

【参考文献】 1)、48)

執筆者：中井克樹 (滋賀県立琵琶湖博物館)

中腹足目 オニノツノガイ科

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

## コゲツノブエガイ *Cerithium coralium* Kiener, 1841

殻高 25mm、殻径 10mm 前後の塔形。殻色は茶褐色から黒褐色。殻表には3列の疣状になった太い縦肋がある。死貝は本州中部以南で見出しされるが、現在では和歌県や愛媛県、九州のごく限られた場所 (61) でしか確認されておらず、東の産地ほど絶滅の危機に瀕している。一方、南西諸島では河川の流入する内湾奥部やマングローブの縁辺の泥や砂泥上に生息し、産地も多く個体密度も高い。南西諸島も含めて、河口や内湾の海岸開発 (13、14)、干潟の土地造成 (23)、水質汚濁 (31) など、とくに南西諸島以外では干潟環境の開発が進行している。

【参考文献】 8)

執筆者：増田 修 (姫路市立水族館)

中腹足目 フトヘナタリ科

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

## カワアイ *Cerithideopsisilla djadjariensis* (Martin, 1899)

殻高 35~50mm。殻表面は石畳状の彫刻になる。殻色は紫がかった褐色で、口唇では縞模様が現れ、南西諸島では唇縁付近が白っぽくなる場合が多く、ヘナタリガイに類似する。太平洋側では房総半島、日本海側では山口県西部以南に分布し、関東地方ではほぼ絶滅したと思われる。内湾や河口の干潮時にも湿潤な、あるいは、水深がごく浅い泥底や砂泥底に生息する。生息環境の河口や内湾の海岸開発 (13、14)、干潟の土地造成 (23)、水質汚濁 (31) など、干潟環境の開発が加わっており、とくに本州・四国以東では絶滅が危惧されている。

【参考文献】 8)、14)

執筆者：増田 修 (姫路市立水族館)



中腹足目 フトヘナタリ科

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

## マドモチウミニナ *Terebralia itoigaeai* (Born, 1778)

殻長 30~60mm。殻口外唇は肥厚してよく張り出し、前端は強くカーブして水管を塞ぐような形状になる。螺肋と縦肋は低くて幅広く、横長の格子目状となる。国内では八重山には分布せず沖縄島のみに限られている。北部の河川に分布するが、生息河川は限られ散見である。内湾奥部やマングローブの林縁部の砂泥や砂上に生息する。生息地周辺の河川改修 (13) や内湾の海岸開発 (14)、道路工事 (24)、は無論、河川流域の土地造成 (23) も急激に進んでおり、各個体群は大きいものの産地が限られている (61) ので絶滅が危惧される。

【参考文献】 8)、48)、80)

執筆者：増田 修 (姫路市立水族館)

中腹足目 フトヘナタリ科

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

## キバウミニナ *Terebralia palustris* (Linnaeus, 1767)

殻長 60~100mm。縫合は浅く直線的で、外唇の張り出しはやや弱い肥厚する。殻色は黒褐色。西表島や石垣島、沖縄島に分布するが、後2島は移入である。マングローブ帯に生息し、ヒルギ類の落葉などを餌にしている。西表島では各河川に架かる橋の付け替えや道路工事 (24)、観光開発や畑地への土地造成 (23) が急ピッチで進み、マングローブへの直接および間接的な影響で衰退が進行しつつある。また、西表島のみ大きな個体群が存在するが、1つの島に産地が限られている (61) ことも絶滅が危惧される要因である。

【参考文献】 8)、48)、80)

執筆者：増田 修 (姫路市立水族館)

中腹足目 ウミニナ科

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

## イボウミニナ *Batillaria zonalis* (Bruguier, 1792)

殻高 40mm、殻径 13mm 前後で細高いが、産地によっては殻高が 25mm ほどの小型 (主に南西諸島)。殻口は肩部が張り出して菱形を呈し、外唇上部は湾入する。九州や南西諸島では多産箇所は少なく、本州 (東海地方以西) や四国では既知産地が少なく希少である。同属のウミニナに比べると衰退スピードが速く、絶滅しやすい。河川改修 (13) や内湾の海岸開発 (14)、土地造成 (23)、道路工事 (24) などによる干潟の消失に加え、本州や四国では生息地はきわめて限られ (61)、生息密度も低い。

【参考文献】 8)、14)

執筆者：増田 修 (姫路市立水族館)

収柄眼目 イソアワモチ科

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

## ドロアワモチ *Onchidium* sp. 1

体長は約 30mm で体は細長い。背面には大小の疣状突起が多数あり、生時には棘状に伸びる。足の幅は体幅とほぼ同じ。背面の色は赤褐色から暗灰色で、疣状突起の先端は赤または黄色。腹面は明褐色から灰色で、外套腹面の周縁がオレンジ色になる。紀伊半島以南の内湾の泥干潟に生息する。琉球列島の一部では必ずしも少なくともはな、日本本土での生息地は限定され、生息環境も埋め立てなどで減少しているため (15)、保全対策が必要。本種はこれまで *O. daemelli* や *O. hongkongensis* の名で呼ばれたが、別種である。

【参考文献】 8)

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

原始有肺目 オカミミガイ科

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

## ナラビオカミミガイ *Auriculastra duplicata* (Pfeiffer, 1855)

殻高約8mm、殻は卵形で殻表は黄色、平滑で光沢が強い。日本と中国南部に分布し、国内では三河湾、伊勢湾、英虞湾、瀬戸内海、九州北西岸、沖縄島北部に分布する。河口干潟のヨシ原湿地内やマングローブ林縁辺の朽ち木や落ち葉の下や湿った土壌の表面に生息する。本土でも沖縄でも生息地や個体数が少なく、近年さらに生息地の減少が見られる。これは護岸工事や埋め立てによる生息地の開発(14, 15, 23, 24)により減少したと考えられるが、生息環境が残されていても個体数が減少している地域もあり、その原因は不明である。

【参考文献】 1)、8)

執筆者：木村妙子 (三重大学大学院生物資源学研究所)

原始有肺目 オカミミガイ科

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

## サカマキオカミミガイ *Blauneria quadrasi* Moellendorff, 1895

殻高約4mm、殻は日本産オカミミガイ科貝類としては唯一の左巻き、細長い円筒形で白色、殻表はほとんど平滑で光沢は強い。沖縄島以南の琉球列島、フィリピンで記録されている。陸上植生までよく保全されたマングローブ湿地内の泥に埋もれた石や朽木の下に生息する。生息地の面積は非常に小さく、個体数も少ない。本種の生息場所は河口域における橋梁工事、河川改修、護岸工事等によって容易に破壊されてしまう(13, 15, 23, 24)。

【参考文献】 8)、36)、46)、48)

執筆者：木村昭一 (愛知県環境審議会)

原始有肺目 オカミミガイ科

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

## オカミミガイ *Ellobium chinense* (Pfeiffer, 1855)

殻高約35mm、日本産のオカミミガイ科としては最大級。殻は長卵形で、褐色の殻皮で覆われる。日本と中国南部、韓国に分布する。国内ではこれまでに東京湾、三浦半島、三河湾、伊勢湾、瀬戸内海、九州北西部に分布が確認されている。1950年代から生息地の破壊の報告がされており、東京湾や三浦半島では絶滅した。瀬戸内海西部、有明海には健全な個体群が残されているが、東部の分布域ほど生息地の隔離が著しい。河口干潟のヨシ原湿地の高潮線付近に限定的に生息し、護岸工事や埋め立てによる生息地の破壊(14, 15, 23, 24)により減少したと考えられる。

【参考文献】 8)、31)、44)

執筆者：木村妙子 (三重大学大学院生物資源学研究所)

原始有肺目 オカミミガイ科

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

## イササコミミガイ *Laemodonta octanflacta* (Jonas, 1845)

殻高約3mm、卵円形で殻質は厚く、殻口内、外唇の歯状突起が強く、貝殻全体に強い螺肋がめぐらされる。マキシジコミミガイをそのまま小型にしたような形態。宮古島以南、熱帯インド・太平洋に分布するが、生息地、個体数ともに非常に少ない(61)。内湾域の泥の多い転石地の石の下に生息する。本種の生息場所は海岸の護岸工事(14)、河口域における橋梁工事、河川改修、護岸工事等の影響を受けやすい(13, 15, 23, 24)。

【参考文献】 8)、46)、48)

執筆者：木村昭一 (愛知県環境審議会)

原始有肺目 オカミミガイ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

## キヌカツギハマシイノミガイ *Melampus sincaporensis* Pfeiffer, 1855

殻高約10mm、殻は卵形で褐色から黒色の色帯があり、殻表は褐色の殻皮で覆われる。日本と東南アジアに分布し、国内では三浦半島以南、三河湾、伊勢湾、瀬戸内海、九州北西岸、鹿児島湾で確認されている。三浦半島では絶滅したと考えられ、現在の分布の東限は三河湾である。河口干潟に発達したヨシ原湿地内の朽ち木や落ち葉の下や湿った土壌の表面に生息する。1960年代から生息地の減少が指摘されており、近年も三河湾や伊勢湾では分布地の消失が確認された。護岸工事や埋め立てによる生息地の破壊(14、15、23、24)により減少したと考えられる。

【参考文献】 1)、31)

執筆者：木村妙子(三重大学大学院生物資源学研究所)

原始有肺目 オカミミガイ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

## コデマリナギサノシタタリ *Microtralia* sp.

殻高約4mm、卵円形で殻質は薄く半透明。ナギサノシタタリ(*M. acteocinoides*)に近似するが、殻は太く丸い。ナギサノシタタリと同様白色の個体も多いが、紫色の個体が出現する点は異なる。ただし、両種の間中間的な個体も認められ、和名は図鑑で仮称されたにすぎず、分類学的な再検討が必要。宮古島、石垣島、西表島で記録されているが生息地、個体数ともに少ない(61)。内湾域のマングローブ湿地内や隣接する泥の多い転石地の石の下に生息する。本種の生息場所は海岸の護岸工事等(14)、橋梁工事、河川改修、護岸工事等の影響を受けやすい(13、15、23、24)。

【参考文献】 17)、30)、48)

執筆者：木村昭一(愛知県環境審議会)

原始有肺目 オカミミガイ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

## ヒヅメガイ *Pedipes jouani* Montrouzier, 1862

殻高約5mm、卵円形で殻質は厚く、殻口内唇の歯状突起が強く特徴的。大隅諸島以南、熱帯太平洋に分布する。琉球列島で海岸に打ち上げられた貝殻の記録例が少数あるが、生きた貝が確認された例は少ない(61)。外洋に面した岩礁海岸の隆起石灰岩の海蝕洞窟内や転石下と内湾域のマングローブ湿地に隣接する泥の多い転石地の石の下に生息する。本種の生息場所は海岸の護岸工事等(14)、河口域における橋梁工事、河川改修、護岸工事等の影響を受けやすい(13、15、23、24)。

【参考文献】 19)、30)、36)、46)、48)

執筆者：木村昭一(愛知県環境審議会)

原始有肺目 オカミミガイ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

## ヒメヒラシイノミガイ *Pythia nana* Bavay, 1908

殻高約15mm、背腹方向に偏圧された卵形。殻口に大きな歯状突起が発達し特徴的な外見である。日本で記録されている同属4種中最も小型。奄美大島、沖縄島、西表島、南大東島、台湾の外洋に面した岩礁海岸の隆起石灰岩の海蝕洞窟内や石の下と内湾域のマングローブ湿地内の朽木や石の下に生息する。2つの生息環境における貝殻の形態には若干の差異が認められる。本種の生息場所は海岸の護岸工事等(14)、河口域における橋梁工事、河川改修、護岸工事等の影響を受けやすい(13、15、23、24)。

【参考文献】 8)、23)、36)、46)、48)

執筆者：木村昭一(愛知県環境審議会)

柄眼目 オカモノアラガイ科

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

## コウフオカモノアラガイ *Neosuccinea kofui* Patterson, 1971

日本固有種とされる。殻長は約8mm、殻は薄く半透明でヒメオカモノアラガイ (*N. lyrata*) に酷似するが、生殖器の形態により区別される。外見ではヒメオカモノアラガイと区別することが困難なため、解剖学的知見を伴わない記録は信頼できない。山梨県、茨城県、埼玉県、神奈川県に限られた場所に生息し、タイプ産地の周辺からは近年になって再発見されていない。水田や湿地に生息するが、このような環境は埋め立てにより消失 (15) する危険が高く、水田の場合は農薬散布 (32) によって死滅する可能性も危惧される。

【参考文献】 99)

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ニッポンマイマイ科

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

## ヒメビロウドマイマイ *Nipponochloritis perpunctatus* (Pilsbry, 1902)

日本固有種。中部地方 (三重県中南部) から近畿地方南部に分布。貝殻はきわめて薄く、殻表に細毛を密生させているが、その密度は極く細かい。殻径はほぼ18~20mm。生殖器の鞭状器は小さくて、痕跡的である。本種は主に原生的な広葉樹林下に生息し、倒木や朽ち木の下などに潜んでいることが多いが、生息密度は低く、個体数もきわめて少ないので、採集圧 (41) などによって個体数が減じ、絶滅が危惧される。

【参考文献】 56)、67)、95)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

柄眼目 ニッポンマイマイ科

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

## ヤンバルマイマイ *Satsuma atrata* (Pilsbry & Gulick, 1900)

日本固有種。貝殻は大型 (殻径 45mm)、ほぼ球形、黒褐色、体層周縁に角がない。体層の上部螺層に肋が明瞭である。本種生殖器の陰茎付属肢は小さいが、鞭状器はそれよりもはるかに長い。オオシママイマイ (*S. oshimae*) は本種に外観がよく似ているが、陰茎付属肢が鞭状器の長さよりもはるかに長いことで異なる。沖縄島国頭地方の山岳地帯のみに生息するが、森林伐採 (11)、道路工事 (24) 等で生息環境が悪化してきている。生息密度は低い。

【参考文献】 38)、65)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

柄眼目 ニッポンマイマイ科

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

## ツヤマイマイ *Satsuma selasia* (Pilsbry, 1902)

日本固有種。和歌山県南部に広く分布する。貝殻は殻径17mm前後、低円錐形状で琥珀色の殻表は和名のごとく、光沢 (艶) がある。殻底に明瞭な臍孔が開く。よく繁ったスギ林の林床の礫間や落ち葉堆積地に生息するが、個体数は多くはない。森林の伐採 (11) によって環境が変わると本種の生息に多大の影響を与える。

【参考文献】 50)、66)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

柄眼目 オナジマイマイ科

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

## エムラマイマイ *Euhadra grata emurai* Kuroda, 1931

日本固有亜種。山形県から新潟県北部に点々と分布する亜種。基亜種であるオオタキマイマイ (*E. g. grata*) よりも大型 (殻径 35mm) になり、その殻表はエナメル状の光沢を呈する。色帯は 0204 型。夏季にはヤブツバキなどの樹幹に登るが、分布・生息地が限られるので採集圧 (41) によって個体数の減少が懸念される。

【参考文献】 39)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

柄眼目 オナジマイマイ科

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

## トビシマイマイ *Euhadra grata tobisimae* Kuroda, 1931

日本固有亜種。基亜種であるオオタキマイマイ (*E. g. grata*) の山形県飛島にのみ分布する小型の亜種。貝殻は左巻き、殻径 25mm 前後、色帯は 0204 型、0234 型が出現するが、相対的に後者の方が多い。タブ、ヤブツバキなどの広葉樹林内に限って生息し、乾季には落ち葉堆積地に潜む。しかし夏季には樹幹に登って、幹に付着しているために目立ちやすく、採集圧 (41) による個体数の減少が進んでいて、生息が脅かされている。

【参考文献】 39)、94)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

柄眼目 オナジマイマイ科

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

## オオアガリマイマイ *Nesiohelix omphalina bipyramidalis* Kuroda & Emura, 1943

日本固有亜種。南大東島に分布。貝殻は重厚で堅く、殻径 24mm。殻表の彫刻は粗造で、粗い成長脈の上に顆粒状になる。北大東島の基亜種であるヘソアキアツマイマイ (*N. o. omphalina*) とは貝殻の形質、生殖器系が相違する。南大東島の森林はほとんどが伐採されて (11)、現在は耕地 (サトウキビ畑) になっているが、本亜種はわずかに残された森林にかろうじて生息している。

【参考文献】 41)、65)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

マルスダレガイ目 シジミ科

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

## リュウキュウヒルギシジミ *Geloina expansa* (Mousson, 1849)

殻長 120mm 程度に達する。殻頂は前方に寄り、腹縁後部は同属種と比較して伸長し、末端は切断されたような輪郭となる。殻皮は黄褐色で、殻はやや薄質。殻表面はなめらかで、輪肋はあまり目立たない。奄美大島以南に分布するが、近年は奄美諸島、沖縄諸島ではほとんど確認できない状況となり、現在の生息は石垣島、西表島にほぼ限られる。奄美諸島、沖縄諸島での衰退状況は、流域の森林開発 (11) や河川開発 (12) の影響を受けているものと考えられる。

【参考文献】 48)

執筆者：中井克樹 (滋賀県立琵琶湖博物館)



マルスダレガイ目 シジミ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

## 台湾ヒルギシジミ *Geloina fissidens* (Pilsbry, 1895)

大型個体では殻長 120mm を超えて成長。同種である可能性のあるヤエヤマヒルギシジミ (*G. yaeyamensis*) と比較して殻幅がやや大きく、殻質が厚い。殻頂は中央よりも前方に偏っている。殻皮は黒褐色で、輪肋上でもあまり毛羽立たない。後背部に沿って太く浅い畝と溝が後縁に達している。奄美大島以南に分布し、マングローブ林内や周辺の干潮時に露出するか濡筋となる潮位に生息し、泥ないし砂泥底に潜っている。南西諸島のマングローブ林は流域の森林開発 (11) や河川開発 (12) の影響を受けることが多い。

【参考文献】 48)

執筆者：中井克樹 (滋賀県立琵琶湖博物館)

マルスダレガイ目 シジミ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

## ヤエヤマヒルギシジミ *Geloina yaeyamensis* (Pilsbry, 1895)

大型個体では殻長 120mm を超えて成長。同種である可能性のある台湾ヒルギシジミ (*G. fissidens*) と比較して殻幅がやや小さく、殻質もやや薄質、殻頂は中央に位置する傾向がある。成長脈上の殻皮は膜状であるか、または毛羽立つ。殻皮は緑褐色で、老成個体でも殻頂部はあまり侵食されない。奄美大島以南に分布し、マングローブ林内や周辺の干潮時に露出するか濡筋となる潮位に生息し、泥ないし砂泥底に潜っている。南西諸島のマングローブ林は流域の森林開発 (11) や河川開発 (12) の影響を受けることが多い。

【参考文献】 48)

執筆者：中井克樹 (滋賀県立琵琶湖博物館)

マルスダレガイ目 ハナグモリガイ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

## ハナグモリガイ *Glaucanome chinensis* Gray, 1828

殻長 20 mm。殻は前後に長く、腹縁は直線的。殻表は平滑で、黄褐色の厚い殻皮に覆われる。殻頂は中央より少し前側に位置する。日本国内での分布域は限られており、東京湾、瀬戸内海、有明湾等の内湾の奥部に分布する。汽水域を含む河口部の潮間帯の泥底に潜入して生息する。強内湾性の種であり、生息域が環境変化の影響を受けやすい。

【参考文献】 —

執筆者：佐々木猛智 (東京大学総合研究博物館)

オオノガイ目 クチベニガイ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

## ヌマコダキガイ *Potamocorbula amurensis* (Schrenck, 1867)

殻は卵形で、殻長は 30mm を超えない。右殻が左殻より大きく、右殻の腹縁は左殻の腹縁より伸びて厚くなっている。殻表は白色で、多くの弱い皺状の筋がある。北海道と東北の汽水湖などに生息し、ヤマトシジミ (*Corbicula japonica*) などと混棲する。有明海にはヒラタヌマコダキガイ (*Potamocorbula laevis*) が、茨城県涸沼には同じ属の別種が侵入しており、これらの外来種が分布を広げていくと本種が駆逐されるおそれがある (56)。

【参考文献】 48)

執筆者：近藤高貴 (大阪教育大学教育学部)

ウミタケガイモドキ目 オキナガイ科

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

## ヒロクチソトオリガイ *Laternula truncata* (Lamarck, 1818)

殻長 50 mm。他のソトオリガイ類よりも殻の後側が長く伸びて末広がりになり、後縁は裁断状。二枚の殻は前側では近接しているが、後側は広く開いており、この特徴が和名の由来になっている。殻色は銀白色で、殻表には微細な顆粒がある。琉球列島以南に分布し、マングローブの発達する河口の泥質干潟の汽水域に生息する。良好な泥質干潟を好むため、河川改修等により生息が影響を受けやすい。

【参考文献】 —

執筆者：佐々木猛智（東京大学総合研究博物館）

原始腹足目 ユキスズメガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ミヤコドリ *Cinnalepeta pulchella* (Lischke, 1871)

殻長約 10 mm。殻は笠型で膨らみが強い。殻頂は殻の後端部近くに位置する。殻表は多数の顆粒状の放射肋がある。殻色は淡褐色。生時は外表面が黒い沈着物で覆われることが多い。殻の内面の周縁部は細かく刻まれる。内面の中央部は平滑で光沢が強い。千葉県・新潟県から沖縄県に分布。河口あるいは淡水の影響を受ける海岸付近の転石の下に生息する。近年生息が確認されている産地は少なく、とくに本土ではかつての産地の多くが失われている。

【参考文献】 —

執筆者：佐々木猛智（東京大学総合研究博物館）

原始腹足目 ユキスズメガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ヒナユキスズメ *Phenacolepas* sp.

殻長 5 mm 前後。笠型で、膨らみが弱く扁平。殻表には細い放射肋と輪肋がほぼ等間隔にあり、交差して格子状の彫刻を形成する。成長とともに放射肋は左寄りに弱く湾曲し、殻頂の位置も殻の正中線より左側に偏る。瀬戸内海や伊勢湾などの内湾に生息する。主に河口周辺の干潟の泥に多少埋もれた転石の下に付着するが、河口から離れた環境にも見られる。転石が埋もれ過ぎても露出しても本種の生息には適さない。人工的に改変された環境では生息が困難である。

【参考文献】 —

執筆者：佐々木猛智（東京大学総合研究博物館）

原始腹足目 ユキノカサガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ツボミガイ *Patelloida lampanicola* (Habe, 1944)

殻長 6 mm 前後。笠型で殻頂は高く突出する。殻表の彫刻は布目状である個体が多いが、非常に弱い放射肋が出る個体もある。色彩は変異が多く、網目状模様と放射彩からなる。太平洋側は宮城県以南に分布する。日本海側の分布は不明である。砂質干潟に生息し、ウミナまたはホソウミナの殻、小石や二枚貝の死殻に付着する。かつて知られていた産地の多くが失われ、各地の個体群が孤立した状態になっている。本種はかつてヒメコザラ (*P. pygmaea*) の変異と考えられていたが、遺伝的に別種であることが明らかになった。

【参考文献】 75)

執筆者：佐々木猛智（東京大学総合研究博物館）

原始腹足目 アマオブネガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## コハクカノコガイ *Neritilia rubida* (Pease, 1865)

殻径 4 mm。殻は平滑で、殻頂は低く、殻全体が丸みを帯びる。殻口は単純で、内唇に歯状突起や結節はできない。殻色は白いが、生時には黒い沈着物に覆われることが多い。蓋は赤褐色である。奄美諸島以南の河川の汽水域から淡水域の転石下に生息する。八重山諸島ではふつうに生息する場所もあるが、国内では健全な産地の数が少ない。コハクカノコ類の分類は以前は十分に研究されていなかったが、Kano & Kase (2003)によって再定義された。

【参考文献】 22)

執筆者：佐々木猛智 (東京大学総合研究博物館)

原始腹足目 アマオブネガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ヒラマキアマオブネガイ *Nerita planospira* Anton, 1839

殻径 30 mm 前後。殻は厚く堅固。殻頂は低く、殻表には多数の顕著な螺肋がある。殻色は暗灰色で、部分的にまだらになる個体がある。殻口の内部は白く、外縁は黒く縁取られる。内唇の滑層には複数の強い結節があり、滑層の縁には大きな黒斑ができる。蓋は黒く平滑。沖縄島以南のマングローブ林の支持根に付着する。良質のマングローブの発達する環境に限られ、国内では生息密度が低い。

【参考文献】 —

執筆者：佐々木猛智 (東京大学総合研究博物館)

原始腹足目 アマオブネガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ツバサカノコガイ *Neritina auriculata* Lamarck, 1816

殻径 15~20 mm。殻はやや扁平で、殻口の両端が翼状に顕著に広がる。殻口の縁は褐色であるが、それ以外の部分は全体が黒い。殻の背面は網目状模様が密にあり、殻縁付近では癒合して、全体が黒くなることが多い。蓋も外縁部を除いて全体的に黒くなる。八重山諸島以南の汽水域に生息する。国内では生息地が少なく、生息密度も低い。

【参考文献】 —

執筆者：佐々木猛智 (東京大学総合研究博物館)

原始腹足目 アマオブネガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## アカグチカノコガイ *Neritina petiti* Récluz, 1841

殻長 20~30 mm。カバクチカノコ (*N. pulligera*) に類似するが、殻高が高く、殻口が丸みを帯びる。殻表はほぼ平滑。内唇部は広く、全体が強い赤みを帯びる。内唇滑層部は広がらない。蓋は淡黄色の地に螺旋状の多数の黒い色帯が入る。八重山諸島以南の河川の上流部の淡水域に生息する。国内では生息地がきわめて限られている (61)。

【参考文献】 —

執筆者：佐々木猛智 (東京大学総合研究博物館)

原始腹足目 アマオブネガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## シマカノコガイ *Neritina turrata* Gmelin, 1791

殻径 15 mm 程度。螺塔は細く高く突出する。殻表は平滑でつやがある。黒地に淡黄色の波打った細い縦縞模様が入る。殻口は白色で、蓋も白い。内唇の滑層は狭く薄い。蓋の表面は平滑で平板的。奄美大島以南のマングロープ林の周辺に生息する。国内では産地の数が少なく、個体群密度も低い。

【参考文献】 —

執筆者：佐々木猛智（東京大学総合研究博物館）

原始腹足目 アマオブネガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## カミングフネアマガイ *Septaria cumingiana* (Récluz, 1841)

殻長約 30 mm。笠型。前後に長い。フネアマガイ (*S. porcellana*) より前後に長く、楕円形で丸みを帯びる。殻頂は殻の後端に突出する。殻表は平滑で、殻皮が厚い。殻色は黒褐色で、無地または黒い波状模様がある。殻口の内部は暗白色。内唇（隔板）は殻口の内側に張り出す。蓋に雌雄2型があることが知られる。八重山諸島以南の汽水域の転石下に生息する。国内では生息地が少ない。

【参考文献】 —

執筆者：佐々木猛智（東京大学総合研究博物館）

原始腹足目 アマオブネガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ベッコウフネアマガイ *Septaria lineata* (Lamarck, 1816)

殻長約 30 mm。他のフネアマガイ類よりも著しく前後に長く、扁平。殻は薄い。殻の幅には変異があり、幅の広い個体は楕円形に近くなり、細い個体は後端が細くなる傾向がある。内面の隔板は薄く、三角形で、他の部分との境界が明瞭。殻色は黄白色の地に細かい暗緑色の三角斑があり、まだら模様になる。殻の内面は白く、外側の模様が透けて見える。鹿児島県以南の汽水域の沈木や岩に付着する。本種は国内の産地では個体数が少ない。

【参考文献】 —

執筆者：佐々木猛智（東京大学総合研究博物館）

原始腹足目 ゴマオカタニシ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ゴマオカタニシ *Georissa japonica* Pilsbry, 1900

殻長約 2 mm で螺塔は高く円錐形。殻表には多数の細かい螺肋がある。縫合はくびれる。関東地方以南の本州、四国、九州、琉球列島、台湾、朝鮮半島にかけて分布する。森林の落葉中や石の下などに生息する。広域に分布し、産地によっては多産するが、分布は散在的である。また、森林の伐採 (11) などにより生息状況の悪化 (とくに本州) が認められる。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励（東京大学大学院理学系研究科）

原始腹足目 ゴマオカタニシ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## リュウキュウゴマオカタニシ *Georissa luchuana* Pilsbry, 1901

殻長約2mm、ゴマオカタニシ (*G. japonica*) に似るが、螺管が著しく太く、螺塔は下膨れ。殻表には多数の細かい螺肋がある。殻色は黄色を帯びる。琉球列島からのみ知られるが、近隣地域からも発見される可能性がある。過去の採集記録は近似種と混同されている可能性があり、再検討が必要。石灰岩に付着していることが多いが、落葉中にも生息する。一部の産地では森林の伐採 (11)、乾燥化による生息状況の悪化が認められる。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

中腹足目 ヤマトニシ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ミヤコヤマタニシ *Cyclophorus turgidus miyakoensis* Pilsbry & Hirase, 1905

日本固有亜種。宮古島、伊良部島に生息する。貝殻は円錐形で重厚、殻径20mm前後、殻口唇は白色 (近似亜種ヤエヤマヤマタニシ (*C. t. radians*) の殻口唇は淡橙色)。体層の周縁は多少角張る傾向にある。殻表には紫褐色の色帯を断絶させる淡黄色の模様がジグザグに表れるので美しい。森林下の落葉堆積中に生息している。

【参考文献】 55)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

中腹足目 ヤマトニシ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ケハダヤマトガイ *Japonia barbata* (Gould, 1859)

日本固有種。草垣群島、屋久島、奄美諸島、沖縄諸島に分布。貝殻は円錐形状で小型 (殻径6mm)、暗褐色を呈する。体層に螺状脈のように2列の毛状突起が顕著である。上記のように分布域は広く、森林下の落葉層に生息しているが、殻表の毛状突起などに土屑を付けている個体が多く、生息地では確認が難しく、しかも個体数が少ない。

【参考文献】 60)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

中腹足目 ヤマトニシ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## イトマキヤマトガイ *Japonia striatula* Kuroda, 1973

日本固有種。男女群島と宇治群島に分布する。本種は原記載時には殻毛の脱落した個体で記載されたが、後日得られた新鮮な個体では体層に2列の長くて尖った毛状突起の存在が確認された。殻長径は4mmで小型。生息地は落葉層であるが、貝殻が生息環境と同様な色彩であるうえに、毛状突起が土で固まって土塊状になっているために発見しにくい。

【参考文献】 49)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)



中腹足目 ヤマトニシ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## アオミオカタニシ *Leptopoma nitidum* Sowerby, 1843

主に沖縄諸島、八重山諸島、台湾に分布するが、近年は奄美諸島（徳之島など）からも記録された。貝殻は殻径17mm前後、円錐形状、半透明。そのために緑色の軟体部の外套膜が透けて見えるので、和名のアオミ（青身）の語源になっている。樹上性で樹幹や葉に付着しているが、美麗であるために目立ちやすく、採集圧（41）によって個体数が激減している。

【参考文献】 38)、52)、55)

執筆者：湊 宏（日本貝類学会）

中腹足目 ヤマトニシ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ヨナクニアツブタガイ *Platyrhaphe hirasei yonakunijimanus* Kuroda, 1960

日本固有亜種。与那国島にのみ生息する亜種。貝殻は小型（殻径7.5mm）で円盤形状、縫合に沿った殻表には白色系の粗い成長脈が顕著である。殻口縁は全縁で肥厚しない。落葉層の土壌面に生息していて、常に殻表に土屑を付けているために土塊に類似して見つけにくい。雨天には落ち葉の上を匍匐しているのが観察される。

【参考文献】 52)

執筆者：湊 宏（日本貝類学会）

中腹足目 ムシオイガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## サツمامシオイ *Chamalycaeus satsumanus satsumanus* (Pilsbry, 1902)

日本固有亜種。四国南部、九州南部（屋久島、種子島を含む）などに分布するが、これは本亜種のほかに別亜種を包括した範囲である。貝殻は小型（殻径3~3.7mm）で、その螺層には螺状脈が認められる。森林下の落ち葉堆積中に生息しているが、小さいため生息確認は困難である。

【参考文献】 98)

執筆者：湊 宏（日本貝類学会）

中腹足目 タニシ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## オオタニシ *Cipangopaludina japonica* (Martens, 1860)

殻高60mm前後に成長する。螺層は近縁種のマルタニシ（*C. chinensis laeta*）ほど膨らまず、縫合部は浅い。周縁部は角張り、とくに胎児殻ではその傾向が顕著で菱型の概形を呈するが、大型個体では目立たなくなる。北海道から九州にかけて分布し、河川や用水路、ため池、湖沼に生息するが、マルタニシのように水田内に生息することはほとんどなく、水田周辺では湧水があるなどあまり高温にならない環境を好む傾向がある。本種の生息する水田周辺の環境は、ため池を含め圃場整備等の人為的改変の影響（15）を強く受け、各地で存続が脅かされている。

【参考文献】 26)、48)

執筆者：中井克樹（滋賀県立琵琶湖博物館）

中腹足目 タマキビ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## イロタマキビガイ *Littoraria conica* (Philippi, 1846)

殻高約 20 mm。ウズラタマキビ (*L. scabra*) に類似するが、螺層の膨らみが弱い。殻表には明瞭な螺肋があり、その内の数本は他の肋よりも強いことが多い。とくに、体層の周縁上の肋は強く角張る。殻の色彩は変異が多く、黄色、オレンジ、淡褐色の無地、またはまだら模様になる。奄美諸島以南に分布し、マングローブの樹上に生息する。本種の生息には良好なマングローブ林の存在が重要である。

【参考文献】 —

執筆者：佐々木猛智 (東京大学総合研究博物館)

中腹足目 カワグチツボ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## カワグチツボ *Iravadia elegantula* (A.Adams, 1863)

殻高約 5 mm と小型で長卵形。殻質は薄く、殻表には微細な螺状がある。狭いが臍孔が開く。蓋は革質で薄い。ワカウラツボ (*I. sakaguchii*) と近似するが、殻が薄いこと、臍孔があることから明確に区別される。東北地方以南、九州北部の内湾汽水域の潮間帯付近の泥干潟表面に生息する。本種の生息場所は海岸の護岸工事 (14、23)、橋梁工事、河川改修、護岸工事等の影響を受けやすい (13、15、24)。

【参考文献】 8)、31)、48)

執筆者：木村昭一 (愛知県環境審議会)

中腹足目 ミズゴマツボ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## エドガワミズゴマツボ *Stenothyra edogawaensis* (Yokoyama, 1927)

殻は楕円卵形で、背腹方向に大きく偏圧される。殻表面は黄褐色で鈍い光沢があり、螺層表面には微細な刻点列がある。体層は4層程度からなり、背面に暗色帯が現れる。殻高は2 mm 程度と、非常に小型である。本州 (太平洋側は宮城県以南、日本海側は新潟県以南)、四国、九州に分布し、内湾や河口の汽水域の砂泥や岩礫上、ヒトエグサなどの葉上に生息する。河川改修や護岸工事による生息場所の開発や、水質汚濁によって生息が脅かされている (13、31)。

【参考文献】 48)

執筆者：近藤高貴 (大阪教育大学教育学部)

中腹足目 ミズゴマツボ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ミズゴマツボ *Stenothyra japonica* Kuroda, 1962

日本固有種。殻は楕円卵形で、背腹方向に大きく偏圧され、体層は4層程度からなる。殻表面は黄褐色で鈍い光沢があり、螺層表面には明瞭な刻点列がある。殻高は6 mm 程度である。本州 (太平洋側は青森県以南、日本海側は新潟県以南)、四国、九州に分布する。汽水域の最奥部で、わずかに潮の影響がある場所のヨシ原泥底に生息する。内陸の良好な状態の水田などに海進時の遺存的な個体群が存在していることもある。繁殖期は6～8月と推定されている。河川開発や圃場整備 (13、23) 等によって生息地が消失し、絶滅した個体群もある。

【参考文献】 45)

執筆者：近藤高貴 (大阪教育大学教育学部)

中腹足目 エゾマメタニシ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## エゾマメタニシ *Bithynia moltschanovi* Lindholm, 1914

殻は卵形で、殻高8mm前後である。殻表面は淡黄褐色の半透明で、軟体の模様が透けて見えるが、通常は二次的な付着物で覆われている。各螺層はよく膨らみ、縫合はきわめて深い。蓋の核は中央に位置する。国外ではシベリアに分布するが、国内では北海道釧路湿原の塘路湖周辺や青森県十三湖などで記録があるに過ぎない。湿原の乾燥化などの環境変化の影響で生息が脅かされている。

【参考文献】 48)

執筆者：近藤高貴 (大阪教育大学教育学部)

中腹足目 カワザンショウガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ムシヤドリカワザンショウ *Angustassiminea parasitologica* Kuroda, 1958

殻高4～5mm。殻色は黄褐色から赤褐色で光沢があり、縫合下と臍域はクリーム色となる。老成個体は全面が白く侵食される。東海地方以西の本州、四国、九州にかけてのヨシの生える河口汽水域に広く分布する。ヨシ群落内の泥上や漂着物、ヨシなどの枯死した堆積物の下に多く、ヨシの茎に登って休眠していることもある。本種の生息には、ヨシの繁茂が不可欠のようである。河川改修 (13) や内湾の海岸開発 (14)、土地造成 (23)、道路工事 (24) などによる河口のヨシ原の消失、水質汚濁 (31) が各地で進行しているため、絶滅が心配される。

【参考文献】 8)、48)

執筆者：増田 修 (姫路市立水族館)

中腹足目 カワザンショウガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## オイランカワザンショウ *Angustassiminea* sp.

殻高3mmほどのヨシダカワザンショウ (*A. yoshidayukioi*) に似た未記載種。光沢のある濃い赤褐色をし、きわめて狭い臍孔があり、周辺には明瞭な白帯がある。奄美大島以南の南西諸島に分布する。河口干潟の流下物や礫下、湿性植物群落の株元に生息する。場所によっては高潮帯を越えた陸地の落葉や礫下にも生息する。分布域は広いものの、生息地が河口や内湾奥部にあるため、河川改修 (13) や内湾の海岸開発 (14)、土地造成 (23)、道路工事 (24)、水質汚濁 (31)、マングローブの消失などの影響を受けやすい。

【参考文献】 8)、48)

執筆者：増田 修 (姫路市立水族館)

中腹足目 カワザンショウガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## エレガントカドカドガイ *Ditiropisena* sp. 1

福田 (1966) で紹介された未記載種である。殻径2mm、殻高1.2mmほどの低い円錐形をし、ミニカドカドガイ (*Ditiropisena* sp. 4) に類似するが、サイズが一回り大きい。西表島や石垣島の海岸飛沫帯や河口の潮位の高い岩礫帯の石裏などに生息する。本属の他種に比べると産地が最も多く見つかっているようだが、決して多いといえない。海岸の護岸化 (14)、沿岸部の土地造成 (23) や道路工事 (24) などによって既知産地も存続が危ぶまれている。また、現段階では産地が局限 (61) している。

【参考文献】 8)、80)

執筆者：増田 修 (姫路市立水族館)

中腹足目 カワザンショウガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## デリケートカドカドガイ *Ditiropisena* sp. 2

福田 (1966) で紹介された未記載種である。低い円錐形をし、ドームカドカドガイ (*Ditiropisena* sp. 3) を低くしたような形態である。宮古島の一部でしか確認されていない希少種であるが、この産地は護岸工事で消失したため、現状では新たな既知産地の報告がない状況下にある。産地が局限 (61) していたことに加え、海岸の護岸化 (14)、沿岸部の道路工事 (24) などが進行し、既知産地は消失し、現状はよくわかっていない。

【参考文献】 8)

執筆者：増田 修 (姫路市立水族館)

中腹足目 カワザンショウガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ドームカドカドガイ *Ditiropisena* sp. 3

福田 (1966) で紹介された未記載種である。殻径 2mm ほどの低い円錐形をし、殻高は相対的に高く、螺管殻部には螺肋はなく、周縁に 1 本ある。臍孔周縁はキール状になる。成長脈は波打ち粗い。沖縄島中・北部、与那国島で見つかっている。外洋に面した海岸の飛沫帯などの岩礫下などに生息する。既知産地は数か所では知られていない。海岸の護岸化 (14)、沿岸部の道路工事 (24) などによって既知産地も存続が危ぶまれている。また、現段階では産地が局限 (61) している。

【参考文献】 8)、80)

執筆者：増田 修 (姫路市立水族館)

中腹足目 カワザンショウガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ミニカドカドガイ *Ditiropisena* sp. 4

福田 (1966) で新称された未記載種である。殻径 1.5mm 程度の低い円錐形をし、エレガントカドカドガイ (*Ditiropisena* sp. 1) に類似するが、サイズが一回り小さい。キール状の螺肋は縫合の下 (螺管肩部) と周縁に 1 本ずつあり、臍孔周縁もキール状になる。沖縄島北部の羽地内海でのみ知られる。既知産地は羽地内海のみであり、現段階では産地がきわめて局限 (61) している。海岸の護岸化 (14)、沿岸部の道路工事 (24) などによって既知産地の存続が危ぶまれている。

【参考文献】 8)、80)

執筆者：増田 修 (姫路市立水族館)

中腹足目 カワニナ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## タテヒダカワニナ *Biwamelania decipiens* (Westerlund, 1883)

琵琶湖水系の固有種。殻は細長く、殻高 30mm 程度で、ビワカワニナ類の中では細長い概形をもつ。縦肋が顕著でヒダ状となり、殻底肋は 2~3 本。湖岸沿いの浅い水域に多く、生息する底質は石礫底から砂底まで幅広いが、砂礫底に多い。琵琶湖の北湖、南湖のほぼ全域に分布するほか、流出河川の淀川の一部にも生息する。長野県、群馬県、山梨県等での記録は人為分布。琵琶湖では現在もふつうに見られるものの、淀川ではほとんど確認されなくなっているが、その原因は不明である。

【参考文献】 25)、26)

執筆者：中井克樹 (滋賀県立琵琶湖博物館)

中腹足目 カワニナ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ヤマトカワニナ *Biwamelania niponica* (Smith, 1876)

琵琶湖水系の固有種。殻はやや太く、ふつうは殻高は30mmまでと小型だが、竹生島、多景島、沖の白石に分布するものは殻高50mm近くにまで成長しチクブカワニナと呼ばれる。典型的な個体は、縦肋上に大きな瘤状の突起が3～5個並ぶ独特な形態を示すが、瘤状突起が不明瞭となり縦肋がひた状になった個体（縦肋型）も琵琶湖北端部の湖岸などに出現する。主として岩礁域に生息するため、人工湖岸化が進んだ南湖では生息環境が増加した。下流の淀川ではかつては生息していたが、現在ではまったく確認されなくなった。しかし、その原因は不明である。

【参考文献】 25)、26)

執筆者：中井克樹（滋賀県立琵琶湖博物館）

中腹足目 フトヘナタリ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## フトヘナタリ *Cerithidea rhizophorarum* A. Adams, 1855

殻高35～40mm。殻表面は顆粒状になり、成貝では幼貝層が欠落する。白地に褐色や黒色、灰色などの色帯をめぐらす。東京湾以南に分布するが、東日本では絶滅または絶滅寸前の状況下にある。瀬戸内海では兵庫県、岡山県の大型河川を中心に多産箇所が存在する。奄美大島以南には、一回り小さい南方型とされるイトカケヘナタリガイ型が分布する。河川改修(13)、内湾の海岸開発(14)、土地造成(23)、道路工事(24)によるヨシ帯の衰退、水質汚濁(31)による腐泥の堆積などにより急激な減少を見る場所もあることから、とくに南西諸島以外では注意が必要である。

【参考文献】 8)、14)、31)、48)

執筆者：増田 修（姫路市立水族館）

中腹足目 フトヘナタリ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ヘナタリガイ *Cerithideopsis cingulata* (Gmelin, 1791)

殻高30mmほどで、体層の右には太く張り出した縦張肋があり、前面は平坦になる。外唇はよく広がり、下（底）端は水管溝を越えて伸張する。殻色は黄褐色の地色と3～4本の黒線を螺肋溝にめぐらす。本州中部以南から南西諸島にかけて広く分布する。淡水の影響する内湾干潟の砂泥底に生息する。南方ではマングローブ周辺の砂泥地などに多産するが、主に本州の産地では河川改修(13)や内湾の海岸開発(14)、土地造成(23)、道路工事(24)、水質汚濁(31)などにより絶滅した生息地も多く、絶滅が危惧される産地も少なくない。

【参考文献】 8)、14)、31)、48)

執筆者：増田 修（姫路市立水族館）

中腹足目 ウミナ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ウミナ *Batillaria multiformis* (Lischke, 1869)

殻高30mm前後で細高い。ホソウミナ (*B. cumingii*) に類似するが、殻口上唇（後溝）には滑層が発達し、体層や外唇はよく張り出す。干潟のほとんどない日本海側には元来あまり生息しない。太平洋側では広く分布するが、関東地方では衰退が著しい。近畿以西でも一時は絶滅寸前になっていた既知産地も見受けられたが、現在では生息数が復活した場所も少なくない。一方で、河川改修(13)や内湾の海岸開発(14)、土地造成(23)、道路工事(24)などによる干潟の消失や水質汚濁(31)により、各所で根本的な生息地が奪われているため楽観視できない。

【参考文献】 8)、14)

執筆者：増田 修（姫路市立水族館）



収柄眼目 イソアワモチ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ゴマセンベイヤワモチ *Platevindex* sp. 1

体長は約 15mm で、体は小型で扁平。背面の疣状突起は細かい。担眼突起は背面の全域に散在する。足は狭く、体幅の 1/2 以下。背面は褐色から黒灰色。腹面は黒灰色から白色で、足裏と両側部の色が異なることもある。琉球列島のマングローブ域に生息するが、その生息環境は悪化している。複数の種が混じっている可能性があり、再検討が必要。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

原始有肺目 オカミミガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ナガオカミミガイ *Auriculastra elongate* (Kuster, 1852)

殻高約 15mm、殻は細長い紡錘型。殻頂部がよく保存され、殻の色彩が黄褐色で光沢が強い個体群と、殻頂部が浸食され欠落し、殻の色彩が茶褐色で光沢が弱い個体群があり、分類学的な検討が必要である。奄美大島以南、熱帯インド・太平洋の内湾域のマングローブ湿地内の石や朽木の下に生息する。本種の生息場所は河口域における橋梁工事、河川改修、護岸工事等の影響を受けやすい (13、15、23、24)。

【参考文献】 8)、30)、36)、46)、48)

執筆者：木村昭一 (愛知県環境審議会)

原始有肺目 オカミミガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ウラシマミミガイ *Cassidula mustelina* (Deshayes, 1830)

殻高約 20mm。殻口外唇から殻軸部にかけて強く肥厚し、カタシノミミミガイ (*C. crassiuscula*) に似るが、貝殻の殻皮は薄く、多くの個体では欠落しているなどの特徴から区別される。貝殻の大きさ、色彩は変異が多い。沖縄島以南、熱帯太平洋に分布するが、国内では沖縄島のみ分布に限られる。生息地は多くないが、生息地では個体数が多い。内湾域の陸上植生までよく保全されたマングローブ湿地内の樹木の幹や葉の上に生息する。本種の生息場所は河口域における橋梁工事、河川改修、護岸工事等の影響を受けやすい (13、15、23、24)。

【参考文献】 23)、30)、36)、46)、48)

執筆者：木村昭一 (愛知県環境審議会)

原始有肺目 オカミミガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ヒゲマキシノミミミガイ *Cassidula plecotrematoides plectrematoides* Mollendorff, 1901

殻高約 10mm。本州、九州に分布するシノミミミガイ (*C. plecotrematoides japonica*) とは貝殻に微細な殻皮毛が発達すること、やや小型であることなどから区別できるとされるが、区別は微妙で、分類学的な再検討が必要である。生態には異なる部分が認められ、生息できる環境がシノミミミガイより多様である。本亜種は、奄美大島以南、熱帯インド・太平洋に分布する。内湾の転石海岸の潮間帯上部の石の下やマングローブ湿地内および周辺の泥に埋もれた石や朽木の下に生息する。本種の生息場所は海岸の護岸工事 (14)、河口域における橋梁工事、河川改修、護岸工事等の影響を受けやすい (13、15、23、24)。

【参考文献】 8)、46)、48)

執筆者：木村昭一 (愛知県環境審議会)

原始有肺目 オカミミガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ウスコミミガイ *Laemodonta exaratoides* Kuroda, 1957

殻高約6mm、殻は太い紡錘形で表面に細かい螺肋がある。クリイロコミミガイ (*L. siamensis*) に近似するが、殻皮毛があり、殻口前端に弱い角が出るなどの特徴により明確に区別できる。東北地方以南、九州、韓国に分布する。陸上植生がよく保存された内湾域の潮間帯上部から飛沫帯付近の石の下や石組みの間に潜んでいる。河口域の泥干潟のヨシ原湿地内の転石下に生息することもある。本種の生息場所は海岸の護岸工事等 (14、23)、橋梁工事、河川改修、護岸工事等の影響を受けやすい (13、15、24)。

【参考文献】 8)、23)、31)、46)、48)

執筆者：木村昭一 (愛知県環境審議会)

原始有肺目 オカミミガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## シュジュコミミガイ *Laemodonta minuta* Mollendorff, 1885

殻高約3mm、卵円形で殻口内、外唇の歯状突起がある。マキシジコミミガイ (*L. monilifera*) に近似するが、殻質が薄く、貝殻全体の螺肋は弱い。房総半島以南、琉球列島、中国南部に分布する。外洋から内湾の潮間帯上部の転石地、マングローブ湿地周辺の石の下に生息する。本州、九州ではとくに生息地の面積は小さく、個体数も少ない。本種の生息場所は海岸の護岸工事 (14)、河口域における橋梁工事、河川改修、護岸工事等の影響を受けやすい (13、15、23、24)。

【参考文献】 8)、30)、46)、48)

執筆者：木村昭一 (愛知県環境審議会)

原始有肺目 オカミミガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## マキシジコミミガイ *Laemodonta monilifera* (H. & A. Adams, 1854)

殻高約5mm、卵円形で殻質は厚く、殻口内、外唇の歯状突起が強く、貝殻全体に強い螺肋がめぐらされる。房総半島以南、熱帯インド・太平洋に分布する。本州、九州ではやや外洋に面した転石海岸の潮間帯上部の石の下で採集されるが生息地は限定され、個体数は少ない。奄美大島以南の琉球列島では主にマングローブ湿地内および周辺の石や朽木の下に生息する。本種の生息場所は海岸の護岸工事 (14)、河口域における橋梁工事、河川改修、護岸工事等の影響を受けやすい (13、15、23、24)。

【参考文献】 8)、30)、36)、46)、48)

執筆者：木村昭一 (愛知県環境審議会)

原始有肺目 オカミミガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ヘソアキコミミガイ *Laemodonta typica* (H. & A. Adams, 1854)

殻高約6mm、卵円形で殻質は厚く、殻口内、外唇の歯状突起が強く、貝殻全体に強い螺肋がめぐらされる。マキシジコミミガイ (*L. monilifera*) に近似するが、臍孔が広く開く。大隅諸島以南の琉球列島、熱帯インド・太平洋に分布する。マングローブ湿地内および周辺の泥に埋もれた石や朽木の下に生息する。生息地の面積は小さく、個体数も少ない。本種の生息場所は河口域における橋梁工事、河川改修、護岸工事等の影響を受けやすい (13、15、23、24)。

【参考文献】 8)、30)、36)、46)、48)

執筆者：木村昭一 (愛知県環境審議会)

原始有肺目 オカミミガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ヌノメハマシイノミガイ *Melampus granifer* (Mousson, 1849)

殻高約12mm、殻は細長い卵形。体層には多数のやや強い螺肋があり布目状になる。殻の色彩は暗紫褐色から白色まで変異がある。奄美大島以南、熱帯インド・太平洋の内湾域のマングローブ湿地内および周辺の石、朽木、打ち上げ物の下に生息する。本種の生息場所は河口域における橋梁工事、河川改修、護岸工事等の影響を受けやすい(13、15、23、24)。

【参考文献】 23)、30)、36)、46)、48)

執筆者：木村昭一 (愛知県環境審議会)

原始有肺目 オカミミガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## チビハマシイノミガイ *Melampus parvulus* (Pfeiffer, 1855)

殻高約8mm、殻は卵形、螺塔は低い。殻の色彩は黒紫褐色が多いが、淡褐色の色帯をもつ個体もある。奄美大島以南、熱帯太平洋の内湾域のマングローブ湿地内および周辺の石や朽木、打ち上げ物の下に生息する。本種の生息場所は海岸の護岸工事等(14、23)、河口域における橋梁工事、河川改修、護岸工事等の影響を受けやすい(13、15、24)。

【参考文献】 8)、30)、36)、46)、48)

執筆者：木村昭一 (愛知県環境審議会)

原始有肺目 オカミミガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ホソハマシイノミガイ *Melampus taeniolatus* (Hombron & Jacquinot, 1854)

殻高約10mm、殻はやや細い卵形。ハマシイノミガイ (*M. nuxeastaneus*) に近似するが、殻が細く貝殻の色彩や色帯に変異が多い。奄美大島以南熱帯インド・太平洋の内湾域のやや開けたマングローブ湿地内や周辺の石、朽木、打ち上げ物の下に生息する。本種の生息場所は海岸の護岸工事(14)、河口域における橋梁工事、河川改修、護岸工事等の影響を受けやすい(15、23、24)。

【参考文献】 23)、30)、36)、46)、48)

執筆者：木村昭一 (愛知県環境審議会)

原始有肺目 オカミミガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ナギサノシタタリ *Microtralia acteocinoides* Kuroda & Habe, in Habe, 1957

殻高約5mm、殻は卵円形で殻質は薄く半透明白色で光沢がある。殻の大きさや色彩は米粒を彷彿とさせる。北海道南部以南、西太平洋に分布する。外洋から内湾の岩礁海岸、転石海岸の潮間帯上部の海蝕洞内の転石下や深く埋もれた石の下、打ち上げ物の下に生息し、内湾のヨシ原湿地内にも生息する場合もある。本種の生息場所は海岸の護岸工事(14)、河口域における橋梁工事、河川改修、護岸工事等の影響を受けやすい(13、15、23、24)。

【参考文献】 28)、31)、36)、46)、48)

執筆者：木村昭一 (愛知県環境審議会)

原始有肺目 オカミミガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## クロヒラシイノミガイ *Pythia pachyodon* Pilsbry & Hirase, 1908

殻高約 25mm、背腹方向に偏圧された卵形。殻口に大きな歯状突起が発達し特徴的な外見である。マダラヒラシイノミガイ (*P. pantherina*) とは酷似しているが、殻口内唇の歯状突起が大きく、体層および螺塔上の弱い皺がない等の特徴により明確に区別される。奄美大島以南、台湾の内湾域のマングローブ湿地内の最上部から陸上植生内の朽木や石の下に生息する。本種の生息場所は海岸の護岸工事 (14)、河口域における橋梁工事、河川改修、護岸工事等の影響を受けやすい (13、15、23、24)。

【参考文献】 8)、23)、36)、46)、48)

執筆者：木村昭一 (愛知県環境審議会)

原始有肺目 オカミミガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## マダラヒラシイノミガイ *Pythia pantherina* (A.Adams, 1851)

殻高約 25mm、背腹方向に偏圧された卵形。殻口に大きな歯状突起が発達し、体層および螺塔上の弱い皺がある。沖縄島以南、熱帯インド・太平洋に分布するが、沖縄島では現在生息は確認されていない。奄美大島での記録もあるが、クロヒラシイノミガイ (*P. pachyodon*) の誤同定の可能性が高い。内湾域のマングローブ湿地内の最上部から陸上植生内の朽木や石の下、内湾に面した転石地の飛沫帯付近の石の下や海浜植物の落葉下にも生息する。本種の生息場所は海岸の護岸工事 (14)、河口域における橋梁工事、河川改修、護岸工事等の影響を受けやすい (13、15、23、24)。

【参考文献】 8)、23)、36)、46)、48)

執筆者：木村昭一 (愛知県環境審議会)

原始有肺目 ケシガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ケシガイ *Carychium pessimum* Pilsbry, 1902

殻高 2.0mm ほどの細い紡錘形をし、螺層数は近似種のニホンケシガイ (*C. nipponense*) の 4~4.5 層よりも多い 6 層を数える。北海道から九州にかけて全国的に分布するが、記録数はニホンケシガイに比べると圧倒的に少なく、また、記録の中にはニホンケシガイの誤同定も多く含まれているのではないかとみなされる。山中の落葉下に生息し、個体密度はきわめて低い。

【参考文献】 —

執筆者：増田 修 (姫路市立水族館)

基眼目 ヒラマキガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ヒラマキガイモドキ *Polypylis hemisphaerula* (Benson, 1842)

殻径 4~5mm。殻の底面は平らで螺塔の周辺部は殻底部が最も突出しているが角張らない。螺塔は平巻き状で、殻の上面は殻頂部がわずかに凹む。臍孔は狭く深い。殻の内部に白色に肥厚したヒダがあり、半透明な殻の外から透けて見える。殻表はなめらかで光沢のある茶褐色を呈する。本州、四国、九州に分布し、池沼、水田、河川の緩流部などに見られる。本種の生息する水田周辺の環境は、ため池を含め圃場整備等の人為的改変の影響 (15) を強く受け、各地で存続が脅かされている。

【参考文献】 25)、48)

執筆者：中井克樹 (滋賀県立琵琶湖博物館)

基眼目 ヒラマキガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## リュウキュウヒラマキガイモドキ *Polypylis usta* (Gould, 1859)

殻径は最大で10mmに達するほかは、ヒラマキガイモドキに酷似する。すなわち、殻の底面と上面はほぼ平らな平巻き状で、殻の上面は殻頂部がわずかに凹む。螺旋周縁は殻底部で最も突出しているが角張らない。臍孔は狭く深い。殻の内部に白色に肥厚したヒダがあり、半透明な殻の外から透けて見える。殻表はなめらかで光沢のある茶褐色を呈する。南西諸島に分布する。本種の生息する水田周辺の環境は、ため池を含め圃場整備等の人為的改変の影響(15)を強く受けるため、生息が脅かされている。

【参考文献】 48)

執筆者：中井克樹 (滋賀県立琵琶湖博物館)

柄眼目 スナガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## スナガイ *Gastrocopta armigerella armigerella* (Reinhardt, 1877)

日本固有種。殻長約2mmで殻は円筒形で白色、成貝では殻口が反曲し、殻口内部には多数の歯(ラメラ)を有する。房総半島以南(伊豆諸島および琉球列島を含む)の海岸近くの落葉下や転石の下に生息する。産地によっては多産するが、沿岸地域の開発によって生息地(とくに日本本土)は減少している。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 キセルガイモドキ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## リュウキュウキセルガイモドキ *Yakuena luchuana luchuana* (Pilsbry, 1901)

日本固有亜種。八重山諸島(与那国島、西表島、石垣島)のほか、近年において、宮古諸島の伊良部島からも確認された。貝殻は右巻きで長円錐形状、殻高15~23mm。殻表全面はクリーム色~白色と褐色の縞が入りくんだ虎斑模様になって美麗。樹上性のためによく目立ち、採集圧(41)によって個体数が減少してきている地域もあって、とくに西表島や石垣島では稀である。本亜種はニシキキセルガイモドキ(*Y.l. eucharista*)と同所的に生息しているので、それぞれが独立種として報告された。

【参考文献】 63)、71)、72)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

柄眼目 キセルガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ミカワギセル *Mesophaedusa hickonis mikawa* (Pilsbry, 1905)

日本固有亜種。基亜種のコンボウギセル(*M. h. hickonis*)は北陸地方、近畿地方、四国など広域に分布するが、本亜種は静岡県西部から愛知県東部(タイプ産地：三ヶ根山)に分布する、小型で殻表の成長脈が粗い型である。この仲間は分布域がきわめて広いために各地から多くの型が報告されているものの、識別は難しく、基亜種の中に包括されるものと考えられる。

【参考文献】 61)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)



柄眼目 キセルガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ハチジョウノミギセル *Metazaptyx hachijoensis* (Pilsbry, 1901)

日本固有種。三宅島から青ヶ島までの伊豆諸島に分布する。貝殻は黄褐色、殻高10mm前後で小型。主襞と縫合の間に1～2個の縫合襞がある。上記の分布地では過去に多産したが、近年は八丈島において個体数が激減している。環境整備と称して消毒作業などが影響しているものと思われる。

【参考文献】 61)、73)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

柄眼目 キセルガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## シリオレトノサマガセル *Mundiphaedusa decapitata* (Pilsbry, 1902)

日本固有種。近畿地方北部から中国地方東部に分布する。貝殻はこの類としては大型(殻高24～29mm)。和名のごとく成貝においては初層部が脱落して尻折れ状になること、殻型が円筒状であることが本種の特徴である。落ち葉や礫の堆積中に生息するため、常に殻皮が剥げて泥白色になる個体が多い。

【参考文献】 61)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

柄眼目 キセルガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## エンシュウギセル *Mundiphaedusa hosayaka* (Pilsbry, 1905)

日本固有種。静岡県西部、愛知県、三重県鳥羽市(タイプ産地)に分布する。貝殻は中型(殻高22～25mm)で、下軸板が殻口縁に出る。本種は以前にホソヤカギセルと称されていたが、原記載の学名の綴りが誤って伝えられてきたためである。それを訂正した(*hosoyaka* → *hosayaka*)機会にエンシュウギセルと改称された。落ち葉の混じった「ガレ場」などに生息する。

【参考文献】 61)、62)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

柄眼目 キセルガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## マツシマガセル *Mundiphaedusa matushimai* (Habe, 1940)

日本固有種。貝殻は中型(殻高22～25mm)、殻表は光沢が強く、虫食い状の腐食部分が点在する。本種は山形県白布高湯をタイプ産地とするが、この仲間は各地の個体群によって殻色が淡黄褐色や黄褐色だったりして2～3の種名が報告されている。貝殻や生殖器構造からこれらは同一種の変異範囲として、本種もクミノギセル(*M. kuninoae*)に包括されるものと考えている。

【参考文献】 61)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

柄眼目 キセルガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ツメギセル *Mundiphaedusa rhopalia* (Pilsbry, 1902)

日本固有種。東京都（西部）、神奈川県、静岡県に分布し、主に朽ち木の下や落葉堆積中に生息する。貝殻は中型（殻高 19～21mm）で、堅固。エンシュウギセル (*M. hosayaka*) に比べて、やや太くて、下軸板が殻口唇縁に現れないことで識別される。

【参考文献】 61)

執筆者：湊 宏（日本貝類学会）

柄眼目 キセルガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## チュウゼンジギセル *Mundiphaedusa sericina* (Moellendorff, 1882)

日本固有種。和名のように栃木県日光市中禅寺湖付近（馬返し）をタイプ産地とし、広く関東地方に分布する。貝殻は中型（殻高 18～20mm）で新鮮な個体では淡褐色を呈して殻表をつけているが、老成すると殻表が汚れて白っぽくなる。短い上腔襞があるが、月状襞や下腔襞は存在しない。朽ち木の下などに生息する。

【参考文献】 61)

執筆者：湊 宏（日本貝類学会）

柄眼目 キセルガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## サドギセル *Paganizaptyx stimpsoni sadoensis* (Pilsbry, 1903)

日本固有亜種。基亜種のツシマギセル (*P. s. stimpsoni*) の他に、3 亜種が知られているが、本亜種はその1 つで佐渡島に生息する。この仲間はこれまで多くの種名・亜種名が公表されている。しかし、それぞれの識別がきわめて難しい。貝殻は小型（殻高 14～15mm）で紡錘形状。落ち葉層に生息して、比較的成群棲する傾向にある。

【参考文献】 40)、81)

執筆者：湊 宏（日本貝類学会）

柄眼目 キセルガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ハスヒダギセル *Stereophaedusa addisoni plagiopyx* (Pilsbry, 1902)

日本固有種。五島列島に分布するが、個体数が少なく稀産種である。貝殻は中型（殻高 16～19mm）で、殻表の成長脈が類似種のギュリキギセル (*S. a. addisoni*) に比べてより細いこと、下腔襞があたかも月状襞のようによく傾くことで異なる。落葉の堆積地などに生息する。

【参考文献】 61)

執筆者：湊 宏（日本貝類学会）

柄眼目 キセルガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ピルスブリギセル *Tyrannophaedusa pilsbryana* (Ancey, 1904)

日本固有種。九州中・北部（長崎県、福岡県など）に分布する。貝殻は小型（殻高 12~15mm）、殻口の背部に弱い隆起部（クレスト）をめぐらす。内唇にある下軸板の周りに数個の刻み、あるいは皺がある。森林下の倒木や朽ち木に付着、または堆積した朽ち木の中に潜んでいる。

【参考文献】 61)

執筆者：湊 宏（日本貝類学会）

柄眼目 キセルガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## コスジギセル *Tyrannophaedusa plicilabris* (A. Adams, 1868)

日本固有種。田辺湾神島をタイプ産地とする本種は、和歌山県中・北部に分布する。貝殻は殻高 15mm 前後で殻表の成長脈が顕著。月状襞が上腔襞と下腔襞が連結して「エ」字型となる。下軸板が殻口縁に出る。森林や朽ち木に付着しているが、雨天時には樹幹を這う。

【参考文献】 61)、66)

執筆者：湊 宏（日本貝類学会）

柄眼目 キセルガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## モリヤギセル *Vastina vasta moriyai* (Kuroda & Taki, 1944)

日本固有亜種。九州を主要分布地とする基亜種のおキギセル (*V. v. vasta*) の亜種で、中国地方と四国西部に分布する。貝殻は大型（殻高 27~33mm）で堅固、おキギセルとは腔襞の数が少ないこと、生殖器の盲管が長いことで識別される。林内の倒木下などに生息しているが、個体数が少ない。

【参考文献】 61)

執筆者：湊 宏（日本貝類学会）

柄眼目 ベッコウマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## スカシベッコウ *Bekkochlamys serenus* (Pilsbry & Hirase, in Hirase, 1908)

日本固有種。殻径は約 6mm で、螺層の巻きは荒く、光沢が強い。東北地方から関東地方にかけて分布し、主として広葉樹林の落葉下に生息する。ウラジロベッコウ (*Urazirochlamys doenitzii*) などと混同されていることが多く、信頼できる記録は少ない。関東地方ではとくに産地が少なく、生息地の環境が悪化している。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励（東京大学大学院理学系研究科）

柄眼目 ベッコウマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ツシマベッコウ *Bekkochlamys subrejetus* (Pilsbry & Hirase, in Hirase, 1908)

対馬と朝鮮半島に分布する。主に落葉広葉樹林の落葉下に生息する。国内では対馬にのみ分布し、個体数は少なく、生息地の環境が悪化している。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## コシダカヒメベッコウ *Ceratochlamys hiraseana* (Pilsbry, 1901)

日本固有種。殻径は約3mm、螺塔はやや高く、周縁には強い竜骨がある。屋久島に分布し、九州からも報告例があるが疑わしい。広葉樹林の落葉下に生息する。信頼できる記録が少なく、生息地の環境が悪化している。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## アワクリイロベッコウ *Japanochlamys awaensis* (Pilsbry, 1902)

日本固有種。殻径は約10mmで殻はやや扁平、螺層は細かく巻く。四国地方の広葉樹林に生息する。いずれの産地においても個体数は少なく、生息状況が悪化している。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ボンキンギビ *Liardetia boninensis* (Pilsbry & Hirase, in Hirase, 1908)

日本固有種とされるが、近隣地域の類似種との関係は再検討が必要。小型で殻径は約3mm、螺塔は低く、殻表の成長脈は細かい。小笠原諸島、大東島、琉球列島に分布し、広葉樹林の落葉下に生息する。小笠原では本種はふつうに見られるが、琉球列島では生息地が少なく、その環境が悪化している。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ヒゼンキビ *Parakaliella hizenensis* (Pilsbry, 1902)

日本固有種とされるが、近隣地域の類似種との関係は再検討が必要。小型で殻高は約3mm、螺塔はやや高く、殻表の成長脈が顕著。本州の東北地方から九州にかけて広く分布し、琉球列島にも分布する可能性がある。主として落葉広葉樹林に生息する。広域に分布するが、信頼できる採集記録が少ない。また、本種はとくに湿潤な森林を好み、生息環境が全国的に悪化している。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ヒメハリマキビ *Parakaliella pagoduloides* (Gude, 1900)

日本固有種。小型で殻高は約3mm、螺塔は本属としては高い。本州の中部地方以南に分布するが、過去の採集記録は疑わしいものが多い。主として落葉広葉樹林の落葉下に生息する。やや広域に分布するが、信頼できる採集記録が少なく、同定の確実な産地においても生息環境が悪化している。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ウメムラシタラガイ *Sitalina japonica* Habe, 1964

殻径は約2.5mm、螺塔はやや高く低円錐形。殻表の螺条に沿って殻皮が突出する。本州の関東地方から九州にかけて分布し、主に広葉樹林の落葉下に生息する。分布域は広いが、生息地は少なく、生息状況も悪化している。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ヒラオオキビ *Trochochlamys labilis persubtilis* (Pilsbry & Hirase, 1904)

日本固有亜種。殻径約8mmで螺塔はやや高く低円錐形で、周縁は強く角張る。伊豆諸島(利島、神津島)の落葉広葉樹林に生息する。分布域が狭く(61)、絶滅の危険がある。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)



柄眼目 ベッコウマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## オオタキキビ *Trochochlamys lioconus lioconus* (Pilsbry & Hirase, 1905)

日本固有種。殻長約7mmで本属としてはやや大型で螺塔は比較的高く、周縁は角張らない。東北地方から中部地方にかけて分布するが、信頼できる記録は少ない。自然度の高い落葉広葉樹林に生息する。採集例が少なく、生息地の環境も悪化している。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## タカキビ *Trochochlamys praealta* (Pilsbry, 1902)

日本固有種とされているが、近隣地域の類似種との分類学的関係については再検討が必要。殻長約5mmで螺塔は細長く円錐形で、螺層は著しく多い。本州の中部地方から九州にかけて分布するが、過去の採集記録には誤同定が含まれており、再検討が必要。主に落葉広葉樹林に生息するが、スギの植林地などでも見られ、夏季にはアオキの葉の裏に付着していることが多い。広域分布種であるが、多くの産地で生息環境が悪化している。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ヒメカサキビ *Trochochlamys subcrenulata subcrenulata* (Pilsbry, 1901)

日本からのみ報告されているが、近隣地域からも発見される可能性がある。殻径約2.5mmで螺塔は低く、周縁には鋭い竜骨がある。殻表の上面には細かい成長脈がある。本州の中部地方から琉球列島にかけて広域に分布する。主として落葉広葉樹林の落葉下に生息する。広域分布種であるが、散在的に分布し、多数の産地で生息状況が悪化している。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ハチジョウヒメベッコウ *Yamatochlamys circumdata* (Pilsbry, 1902)

日本固有種。殻径は約4mm、螺塔は低く円盤形で、殻底に強い螺条がある。関東地方、伊豆諸島、九州、屋久島から発見されており、本州の他の地域にも生息している可能性がある。主として広葉樹林の落葉下に生息する。分布域は広いが、生息域が限定されている。また、本種の生息環境である自然度の高い落葉広葉樹林が減少している。伊豆諸島では近年になって再発見されないため、絶滅した可能性がある。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 カサマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ツヤカサマイマイ *Videnoida carthcartae* (Reeve, 1854)

殻径約 15mm、殻は平たく、周縁には鋭い竜骨がある。底面は膨らみ、光沢が強い。臍の周囲は角張らない。八重山諸島から台湾に分布し、広葉樹林内の倒木下などに生息する。湿潤な森林に生息するが、森林の伐採や乾燥化などによる生息状況の悪化が認められる。また、地域集団間の遺伝的分化が高く、地域集団ごとの保全対策が必要と思われる。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 カサマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## タカカサマイマイ *Videnoida gouldiana* (Pilsbry, 1901)

日本固有種。殻径約 15mm、螺塔は本属としてはやや高く低円錐型で、螺層は細かく巻く。周縁には鋭い竜骨がある。広葉樹林内の倒木下や落葉下などに生息する。大隅諸島から奄美大島にかけて分布するとされるが、過去の記録には複数の種が混同されていると考えられ、再検討が必要。分類学的な検討が進めば、保全対象となる可能性がある。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 カサマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## オオカサマイマイ *Videnoida horiomphala* (Pfeiffer, 1854)

日本固有種。殻径約 25mm、殻は扁平で、周縁には鋭い竜骨がある。臍孔は広く、その周囲は明瞭なキールがある。広葉樹林内の倒木下などに生息する。奄美大島から沖縄島とその属島にかけて分布するとされるが、過去の記録には複数の種が混同されていると考えられ、再検討が必要。分類学的な検討が進めば、保全対象となる可能性がある。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ニッポンマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ウロコビロウドマイマイ *Nipponochloritis bracteatus bracteatus* (Pilsbry, 1902)

日本固有亜種。東北地方から関東地方に分布。貝殻はこの類としては大きい(殻高 13mm、殻径 18mm)。殻表の殻皮突起が鱗片状であることが主要標徴である。別亜種のツクバビロウドマイマイ (*N. b. tsukubaensis*) は殻皮の鱗片がより細かいこと、生殖器の鞭状器と受精囊柄部に多少の違いがあるとして基亜種から識別されたが、貝殻や生殖器に地理的変異があるので再検討が必要である。

【参考文献】 91)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

柄眼目 ニッポンマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## オオスビロウドマイマイ *Nipponochloritis osumiensis* (Pilsbry & Hirase, 1904)

日本固有種。種名は鹿児島県大隅地方を示しているが、九州中部から南部に広く分布するものの、個体数が少ない。貝殻は殻高 14.5mm で、本類としてはやや大型である。殻表の殻毛突起は多少粗く、臍孔は開く。また生殖器の鞭状器は細長い。本種は鞭状器が長いという点ではオオウスビロウドマイマイ (*N. fragosus*) に類似するが、後種は臍孔が閉じること、殻毛突起が極細密であることで識別される。

【参考文献】 58)、87)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

柄眼目 ニッポンマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## キヌビロウドマイマイ *Nipponochloritis pumila pumila* (Gude, 1902)

日本固有亜種。関東地方の中・北部の山地に分布する。貝殻は中型 (殻径 11~13mm)。偏圧された球状、殻高 9~10mm の大半は体層になり、大きい。臍孔は閉じる。神奈川県から静岡県東部には別亜種のカントウビロウドマイマイ (*N. p. kantoensis*) が報告されているが、各地産を調査して詳細に検討する必要がある。

【参考文献】 91)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

柄眼目 ニッポンマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## カントウビロウドマイマイ *Nipponochloritis pumila kantoensis* Sorita, 1986

日本固有亜種。基亜種のキヌビロウドマイマイ (*N. p. pumila*) とは違って、本亜種は関東地方の南部に分布する。貝殻の 2~3 の形質が基亜種に比べて相違するとされているが、それが種内変異であるかなどを含めて、各地産による比較検討が期待される。

【参考文献】 91)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

柄眼目 ニッポンマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## アナナシマイマイ *Satsuma cristata* (Pilsbry, 1902)

日本固有種。和歌山県那智をタイプ産地とする本種は、同県の南部の海岸地域から内陸まで広く分布する。貝殻は中型 (殻径 16mm 前後) で、臍孔は完全に閉じることが和名の由来になっている。よく繁った森林下の林床の落葉層や下草の間などに生息するが、個体数は多くはない。

【参考文献】 50)、66)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

柄眼目 ニッポンマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## コシタカコベソマイマイ *Satsuma fusca* (Gude, 1900)

日本固有種。信越地方、北陸地方、近畿地方北部に分布する。コベソマイマイ (*S. myomphala*) に似るが、本種の螺塔が高く大型(殻径 40mm 前後)になること、生殖器の鞭状器が先端へ細くならないことで識別される。天然林の朽木の堆積地などに生息するが、相対的に個体数が少ない。

【参考文献】 57)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

柄眼目 ニッポンマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ダイトウジママイマイ *Satsuma mercatoria daitojimaensis* (Y. Azuma & M. Azuma, 1994)

日本固有亜種。南大東島に分布する。基亜種のシュリマイマイ (*S. m. mercatoria*) に比べて著しく小型(殻径 24~26mm)で薄質。臍孔が著しく狭いこと、生殖器の陰茎付属肢の先端が鋭く尖ること、陰茎付属肢と鞭状器の長さの比較では後者の方が短いことが本亜種の標徴と考えられる。南大東島の残存の森林内に生息し、クバの枯葉の堆積下で見つかる。生息地がきわめて狭い。

【参考文献】 65)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

柄眼目 ニッポンマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## イエジママイマイ *Satsuma mercatoria iejimana* (Pilsbry & Hirase, 1905)

日本固有亜種。沖縄島に隣接する伊江島、瀬底島に分布。貝殻は濃褐色、大型(殻径 37mm 前後)、体層周縁に黒褐色帯があり、その上下は淡黄白色となる。生殖器の陰茎付属肢が著しく長いことで、基亜種のシュリマイマイ (*S. m. mercatoria*) から識別される。

【参考文献】 64)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

柄眼目 ニッポンマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## サンインコベソマイマイ *Satsuma omphalodes* (Pilsbry, 1901)

日本固有種。山陰地方(島根県東部、隠岐諸島、鳥取県)、兵庫県北部、岡山県、広島県に分布。貝殻は殻径 45mm 前後で、近似種のコベソマイマイ (*S. myomphala*) に比べて、明らかな臍孔が開くこと、生殖器の鞭状器が細長く伸びることで識別される。隠岐諸島に生息する小型の個体は本種の離島型(ヘソアキコベソマイマイ)で本種のシノニムと考えられる。

【参考文献】 53)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

柄眼目 ニッポンマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ヤマタカマイマイ *Satsuma papilliformis* (Kobelt, 1875)

日本固有種。北陸地方、近畿地方北部、中国地方東部に分布し、分布の西限は広島県帝釈峡である。貝殻は卵形の高円錐形状で、体層に褐色帯をめぐらし、臍孔は閉じる。森林の縁辺部に生息して、雨天には植物に付着しているが、分布地域では相対的に個体数が激減してきている傾向にある。

【参考文献】 59)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

柄眼目 ニッポンマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## タネガシマイマイ *Satsuma tanegashimae* (Pilsbry, 1901)

日本固有種。草垣群島、宇治群島、黒島、口永良部島、屋久島、種子島、悪石島以北のトカラ列島に分布する。朽木の下、落葉の堆積地などで生息する。貝殻は大型（殻径 28mm 前後）、円錐形状で黄褐色～赤褐色を呈し、体層に紫褐色帯をめぐらす。臍孔は閉じる。草垣群島（上ノ島）産の個体はとくに大きく、殻径 35mm に達する。

【参考文献】 51)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

柄眼目 オナジマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## シコクケマイマイ *Aegista aemula shikokuensis* (Pilsbry, 1902)

日本固有亜種。貝殻は中型（殻高 8mm、殻径 13～14mm）、低円錐形状で体層周縁に明瞭な角がある。新鮮な個体ではその周縁角に鱗片状突起の配列をみるが、成貝ではそれが脱落していることがある。本亜種は主に愛媛県を中心に分布するが、中国地方から九州北部の基亜種であるチクヤママイマイ (*A. a. aemula*) や四国の一部に分布するハダカケマイマイ (*A. a. hadaka*) との識別が難しい。

【参考文献】 81)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

柄眼目 オナジマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ヘソカドケマイマイ *Aegista conomphala* Pilsbry & Hirase, 1903

日本固有種。貝殻は中型（殻高 10mm、殻径 20mm）で扁平、きわめて薄質、低円錐形状。体層周縁は竜骨になる。その竜骨上に先の尖った殻毛をめぐらす（老成個体では脱落）。和名のように臍孔の周りに稜角がある。タイプ産地の屋久島のほか、種子島、黒島、トカラ列島（中之島ほか）に分布し、朽ち木の下などに付着している。

【参考文献】 83)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)



柄眼目 オナジマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## オオシマケマイマイ *Aegista kiusiuensis oshimana* (Pilsbry & Hirase, 1903)

日本固有亜種。貝殻は中型（殻高10mm、殻径17mm前後）、レンズ形状、体層周縁に著しい竜骨をめぐらす。臍孔は殻径の1/3ほどに開く。奄美大島に分布する。喜界島のキュウシュウケマイマイ (*A. k. kiusiuensis*) に比べて、より殻色が濃く（栗褐色）、また殻高がさらに高くなることで違いが見られるが、亜種間の詳細な検討が必要である。

【参考文献】 84)

執筆者：湊 宏（日本貝類学会）

柄眼目 オナジマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## トクノシマケマイマイ *Aegista kiusiuensis tokunovaga* (Pilsbry & Hirase, 1905)

日本固有亜種。徳之島に分布する。オオシマケマイマイ (*A. k. oshimana*) に比べて大型の亜種。貝殻は中型（殻高14mm、殻径27mm前後）、低円錐形状、薄質でもろい、体層周縁は顕著な竜骨をめぐらしている。周縁に先の尖った殻毛をつけているが、老成個体では剥落していることが多い。

【参考文献】 88)

執筆者：湊 宏（日本貝類学会）

柄眼目 オナジマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ヒラコウベマイマイ *Aegista kobensis discus* (Pilsbry & Hirase, 1904)

日本固有亜種。高知県中部の石灰岩地（タイプ産地：土佐市天崎）にのみ分布する。貝殻は殻高5～6mm、殻径13～16mm、平巻き状で低平、殻表は光沢がある。基亜種のコウベマイマイ (*A. k. kobensis*) は近畿地方、中国地方、四国に広く分布するが、本亜種は高知県中部の石灰岩地の固有亜種で生息域がきわめて狭い（61）。生息地は石灰岩の採掘（17）等によって環境が悪化してきているので、保護区域の設定などが必要である。

【参考文献】 85)

執筆者：湊 宏（日本貝類学会）

柄眼目 オナジマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## オマオオベソマイマイ *Aegista omma* (Pilsbry & Hirase, 1904)

日本固有種。宮古島、伊良部島のアカマイマイ (*A. oculus*) に類似するが、それよりも小型（殻径15～19mm）で、模式型なものは多良間島に生息するが、貝殻の大小に変異性がある。さらに鳩間島、波照間島、池間島にもこれらに同定される個体群が分布していて、オマオオベソマイマイなのか、今後詳細な検討が必要である。

【参考文献】 16)

執筆者：湊 宏（日本貝類学会）

柄眼目 オナジマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ヒラケマイマイ *Aegista pressa* (Pilsbry & Hirase, 1904)

日本固有種。高知県沖の島に分布するが、生息密度がきわめて低く、かつ個体数が少ない。貝殻は中型（殻高5mm、殻径10～11mm）で低平な円錐形状、体層周縁に顕著な角が認められ、その殻表に鱗片状突起がつく。

【参考文献】 86)

執筆者：湊 宏（日本貝類学会）

柄眼目 オナジマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## カドコオオベソマイマイ *Aegista proba goniosoma* (Pilsbry & Hirase, 1904)

日本固有亜種。貝殻は殻径11mmほどで、体層に比較的顕著な角があること、生殖器に矢囊、粘液腺があることが主要な標徴である。関東地方の山地～平地に分布するが、類似種のコケラマイマイ (*A. p. mikuriyensis*) とは貝殻の形質から識別が困難な場合は生殖器における矢囊等の有無を確認することが必要である。

【参考文献】 3)、89)

執筆者：湊 宏（日本貝類学会）

柄眼目 オナジマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## コケラマイマイ *Aegista proba mikuriyensis* (Pilsbry, 1902)

日本固有亜種。関東地方に分布。貝殻は中型（殻径11～13mm）、体層周縁はほとんど円いので、類似種カドコオオベソマイマイ (*A. p. goniosoma*) が体層周縁に比較的強い角があることで識別される。本亜種においては生殖器に矢囊や粘液腺を欠くことでも異なる。

【参考文献】 3)、89)

執筆者：湊 宏（日本貝類学会）

柄眼目 オナジマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## トウキョウコオオベソマイマイ *Aegista tokyoensis* Sorita, 1980

日本固有種。関東地方の東部の平地に分布する。貝殻は小型（殻径8.5～9mm）、円錐形状で薄質、殻表に鱗片状突起があり、体層周縁に明瞭な角をめぐらす。関東地方に分布するカドコオオベソマイマイ (*A. p. oniosoma*) に類似するが、それよりも小型であること、生殖器の鞭状器に輪状のくびれがあることで識別される。

【参考文献】 90)

執筆者：湊 宏（日本貝類学会）

柄眼目 オナジマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ナガシリマルホソマイマイ *Buliminopsis meiacoshimensis* (Adams & Reeve, 1850)

日本固有種。石垣島、西表島、波照間島に分布する。貝殻は小型（殻高10~11mm、殻径3.6~3.8mm）、塔状である。螺層は11層。殻表は光沢がなく、極く微細な鱗片状突起をつけるが、成貝では摩耗して脱落している個体が多い。雨天には石灰岩上や植物の葉などに登るが、乾季になると落ち葉層に潜む。種名は宮古島を示しているが、これまで宮古島から確認されていないので、原記載時の産地の誤記であるかもしれない。

【参考文献】 38)、54)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

柄眼目 オナジマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## オキマイマイ *Euhadra dixonii okicola* Pilsbry, 1927

日本固有亜種。貝殻は基亜種のサンインマイマイ (*E. d. dixonii*) に比べて小型（殻高19~20mm、殻径19~24mm）で隠岐諸島の固有亜種である。個体には色帯を欠く個体（無帯）、0234型、12(3-4)型の色帯が表れる。樹上性で雨天時には樹幹などに登るが、近年は著しく個体数が激減している。

【参考文献】 76)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

柄眼目 オナジマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ミチノクマイマイ *Euhadra grata gratoides* Kira, 1959

日本固有亜種。青森県西部から秋田県北部の日本海沿岸地域に不連続的に分布する。基亜種のオオタキマイマイ (*E. g. grata*) の亜種よりも小型（殻高18mm、殻径24mm前後）、左巻き、殻色は白色だが色帯を有する個体（0204型、0034型、02(3-4)型）、無帯個体（0000型）などバラエティに富む。低木の樹幹や葉裏などに付着し、樹上性であるが生息地は限られる。

【参考文献】 24)、77)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

柄眼目 オナジマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## コウロマイマイ *Euhadra latispira yagurai* Kuroda & Habe, 1949

日本固有亜種。殻表は和名のごとく、黄櫨（こうろ）色（クリーム色）である。貝殻は低平で、殻高22mm、殻径35~45mm前後。色帯のない個体（無帯）が多いが、0204型を示す個体もある。兵庫県北西部、岡山県北部、鳥取県東部に分布するハクサンマイマイ (*E. latispira*) の亜種。雨季には樹幹に登る。軟体部は黄白色で、その背部に黒縦線が走るのが特徴である。

【参考文献】 97)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

柄眼目 オナジマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ヘグラマイマイ *Euhadra quaesita heguraensis* Kuroda & Tan, 1936

日本固有亜種。基亜種のヒダリマイキマイマイ (*E. q. quaesita*) の能登半島舳倉島に生息する離島亜種であるが、近くの七ツ島からも記録された。基亜種に比べて著しく小型(殻高21mm前後、殻径30mm前後)で、円みがあった個体群である。色帯は0204型の他に、無帯が出現する。生息面積が狭いうえに、年々個体数が減少してきている。

【参考文献】 42)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

柄眼目 オナジマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## イヘヤタトモマイマイ *Phaeohelix phaeogramma iheyaensis* (Pilsbry & Hirase, 1905)

日本固有亜種。貝殻は中型(殻高15mm、殻径21mm前後)、堅固で厚質、低円錐形状、淡黄褐色を呈する。殻表に粗い成長脈が顕著で、体層周縁上に赤褐色帯をめぐらす。臍孔は狭くて深い。殻口外唇の内部に白色の滑層がある。沖縄諸島の伊平屋島にのみ分布し、道路脇の雑草の中などに生息している。

【参考文献】 6)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

柄眼目 オナジマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ガドバリオトメマイマイ *Trishoplita carinata* Gude, 1900

日本固有種。貝殻は中型(殻高8~10mm、殻径11~12mm)、低円錐形状、体層周縁は龍骨状に角張る。殻色は褐色、龍骨状になった周縁上は淡い黄白色帯をめぐらす。臍孔は小さく、殻径の1/7程度に開く。高知県中部の石灰岩地を中心に生息するが、四国全域に分布するシコクオトメマイマイ (*T. shikokuensis*) との形質の差が微妙で、後種は前種に包括される可能性もあり、今後詳細な検討が必要。

【参考文献】 15)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

柄眼目 オナジマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## タシナミオトメマイマイ *Trishoplita collinsoni collinsoni* (A. Adams, 1868)

日本固有亜種。貝殻は殻高7mm、殻径10mm前後で小型。円錐形状で体層周縁は円い。殻色は通常淡い黄白色(稀に赤褐色)で、周縁上に褐色帯をめぐらす。和歌山県南部から三重県南部に分布し、夏季には低木の葉裏などに附着しているが、個体数は多くはない。

【参考文献】 66)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

柄眼目 オナジマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## リシケオトメマイマイ *Trishoplita collinsoni lischkeana* (Kobelt, 1879)

日本固有亜種。貝殻は中型（殻高7～10mm、殻径10～14mm）、円錐形状。螺層は約5層、とくに体層が殻高の2/3を占める。体層には周縁角がなく、細い色帯をめぐらす。臍孔は狭く開き、殻径の1/10ほどになる。貝殻は薄くて半透明のため、生貝の場合は外套膜表面の黒色火炎彩が殻表より透けて見える。山口県北部の海岸地域に分布し、広葉樹の葉裏などに付着する。

【参考文献】 12)

執筆者：湊 宏（日本貝類学会）

柄眼目 オナジマイマイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## シロマイマイ *Trishoplita pallens* Jacobi, 1898

日本固有種。四国中・南部（高知県が中心）の石灰岩地帯に分布し、石灰壁に付着しているが、石灰岩の採掘（17）等で生息地が失われている所もある。香川県では唯一か所で確認されていたものの、ダム建設（25）によって生息地が消えてしまった。貝殻は本類としては大きく（殻高12mm、殻径20mm）、低円錐形状。殻色は和名のように白色、色帯はないが個体によっては貝殻の底面が淡褐色になることもある。

【参考文献】 101)

執筆者：湊 宏（日本貝類学会）

イシガイ目 イシガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ヨコハマシジラガイ *Inversiunio jokohamensis* (Ihering, 1893)

日本固有種。殻は長卵形で、殻長は通常70mmを超えない。殻頂付近に顆粒状の模様があり、後背縁には不明瞭な放射肋がある。北海道と本州（太平洋側は三重県以東、日本海側は兵庫県以東）に分布し、小川や用水路の砂礫～砂泥底に生息する。幼生は殻長0.2mmほどの大きさで、カワムツやヨシノボリに寄生する。河川改修や圃場整備による生息場所破壊や水質汚濁（31）によって生息が脅かされている。また、タナゴ類の産卵母貝として乱獲（41）され、個体群密度が低下している。

【参考文献】 34)

執筆者：近藤高貴（大阪教育大学教育学部）

マルスダレガイ目 チドリマスオ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## クチバガイ *Coecella chinensis* Deshayes, 1855

殻長20～30mmで、殻頂は中央または、わずかに後方にある。殻表面は比較的厚くて光沢のない黄褐色（幼貝では鮮黄色）の殻皮で覆われ、成長とともにやや濃色になる。北海道南部から九州、ならびに中国大陸や台湾に分布する。比較的潮位の高い場所に生息する。国内での分布は広く、局所的に密度の高い場所もあるが、全国的に都市近郊での内湾や河口干潟の環境悪化で減少しつつある。比較的潮位の高い陸側を生息地とするので、河川改修（13）、内湾の海岸開発（14）、土地造成（23）、道路工事（24）の影響を受けやすい。

【参考文献】 48)

執筆者：増田 修（姫路市立水族館）



マルスダレガイ目 フナガタガイ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ウネナシトマヤガイ *Trapezium liratum* (Reeve, 1843)

殻長 30~40mm の楕円形から長方形で、殻頂は前方に寄る。殻頂から後背端にかけて稜角が走るが、老成個体では摩耗し不明瞭になる。東北地方以南の汽水域に分布し、転石の下側面、礫やマガキ礁の隙間に足糸で付着している。瀬戸内海に流入する本州の河川河口では多産するが、各地で河川改修 (13) や内湾の海岸開発 (14)、土地造成 (23)、道路工事 (24) などで生息地の消失が目立っている。

【参考文献】 48)

執筆者：増田 修 (姫路市立水族館)

マルスダレガイ目 シジミ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ヤマトシジミ *Corbicula japonica* Prime, 1864

殻長 20mm 前後の個体が多いが最大で 50mm 程度にまで成長する。殻表面にはウルシ様の光沢があり、成長脈に沿った輪肋は細かく密である。殻色は黒褐色のものが多いが、淡い黄褐色のものもあり、大型個体ではほぼ真っ黒になる。北海道から九州にかけての河川の河口周辺の汽水域や海岸沿いの汽水湖に生息する。日本で漁獲される食用シジミのほとんどが本種であるが、近年、各地の漁獲量は減少が続き、この傾向が継続することが憂慮されている。減少の原因としては湖沼、河川、海岸の開発 (12、13、14) のほか、漁獲圧 (41) も無視できないと考えられる。

【参考文献】 48)

執筆者：中井克樹 (滋賀県立琵琶湖博物館)

マルスダレガイ目 シジミ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## マシジミ *Corbicula leana* Prime, 1864

殻長 20mm 前後までの個体が多いが、最大では 50mm 程度にまで成長する。殻表面は黄褐色から黒褐色を呈し、淡色の個体では濃色の不規則な斑紋が見られるが、生息地、生息環境の違いによる変異が著しい。本州、四国、九州に広く分布するが、ヤマトシジミ (*C. japonica*) のようには漁業資源として重要視されているわけではない。河川、水路、ため池などの純淡水域に生息し、生息環境の改変 (13、15) に加えて、外来のタイワンシジミ (*C. fluminea*) 種群と競争的に置換されること (56) が新たな脅威となっている。

【参考文献】 48)

執筆者：中井克樹 (滋賀県立琵琶湖博物館)

中腹足目 ミズツボ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## コウチミジンツボ *Akiyoshia morimotoi* (Kuroda & Habe, 1958)

殻高 1.5mm 程度までの、きわめて微小な巻貝。殻は薄質で白色半透明。四国各県の掘り抜き井戸で見つかっている地下水棲の種である。その生息環境の特殊さゆえに、確認された記録は非常に断片的でしかない。四国から記録されているものがすべて本種に該当するかどうか分類の再検討が必要だが、情報が不足している。

【参考文献】 48)

執筆者：中井克樹 (滋賀県立琵琶湖博物館)

基眼目 ヒラマキガイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ヒラマキミズマイマイ *Gyraulus chinensis spirillus* (Gould, 1859)

殻径5mm前後。螺塔は平巻き状で、螺層の周縁部は円いかわずかに角張る。臍孔は広く浅い。殻色は濃色の付着物により暗褐色を呈するものから、付着物が少なく淡褐色半透明のものまである。日本各地に分布し、池沼や水路、水田などの周辺水域に見られることが多い。本種の生息する水田周辺の環境は、ため池を含め圃場整備等の人為的改変の影響(15)を強く受け、各地で存続が脅かされている。トウキョウヒラマキガイ (*G. tokyoensis*) やヒメヒラマキミズマイマイ (*G. pulcker*) 等、形態が酷似した種が複数知られており、各地の生息情報は注意深く再検討する必要がある。

【参考文献】 26)、48)

執筆者：中井克樹 (滋賀県立琵琶湖博物館)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ダンジョベッコウ *Bekkochlamys danjoensis* Minato, 1974

日本固有種。殻は平たく、ヒラベッコウガイ (*B. micrograpta*) に似る。男女群島の固有種とされるが、近似種との関係について再検討が必要。詳細な分類学的検討が進めば保全の対象となる可能性がある。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## コウベヒラベッコウガイ *Bekkochlamys depressus* (Jacobi, 1898)

日本固有種。殻径約10mmで、貝殻はヒラベッコウガイ (*B. micrograpta*) に酷似する。信頼できる採集記録が少なく、近似種との関係についても再検討が必要。詳細な分類学的検討が進めば保全の対象となる可能性がある。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## オオヒラベッコウ *Bekkochlamys dulcis* (Pilsbry, 1902)

日本固有種。殻径約12mmで、ヒラベッコウガイ (*B. micrograpta*) よりもやや大きく螺層の巻きが荒い。本州から四国、九州からの報告があるが、過去の採集記録には近似種が混同されている可能性が高く、再検討が必要。広葉樹林やスギの植林地などに生息するが、良好な生息環境は減少しており、詳細な分類学的検討が進めば保全の対象となる可能性がある。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ミドリベッコウ *Bekkochlamys kagaensis* (Pilsbry & Hirase, 1902)

日本固有種。殻径約15mmで、ベッコウマイマイ (*B. perfragilis*) に似る。本州中部地方周辺に分布するとされるが、近似種との関係について再検討が必要。詳細な分類学的検討が進めば保全の対象となる可能性がある。本種は大型のベッコウマイマイとしては最も北に分布する。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## コシキオオヒラベッコウ *Bekkochlamys koshikijimanus* (Pilsbry & Hirase, 1904)

日本固有種。殻径約12mmで、ベッコウマイマイ (*B. perfragilis*) よりもやや小型。甌列島の固有種とされるが、近似種との関係について再検討が必要。詳細な分類学的検討が進めば保全の対象となる可能性がある。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ミヤコベッコウ *Bekkochlamys kurodai* (Habe, 1957)

日本固有種。貝殻はヒラベッコウガイ (*B. micrograpta*) に酷似し、生殖器の形態が異なるとされる。京都をタイプ産地として記載されたが、原記載以降は信頼できる採集記録がほとんどなく、近似種との関係についても再検討が必要。詳細な分類学的検討が進めば保全の対象となる可能性がある。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## クロシマベッコウ *Bekkochlamys kuroshimana* (Hirase, 1908)

日本固有種。殻径約8mmで、ヒラベッコウガイ (*B. micrograpta*) に似る。鹿児島県黒島 (三島村) の固有種とされるが、近似種との関係について再検討が必要。詳細な分類学的検討が進めば保全の対象となる可能性がある。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ヒラベッコウガイ *Bekkochlamys micrograpta* (Pilsbry, 1900)

日本固有種。殻径約10mmで、貝殻はやや平たく光沢が強い。本州から四国、九州に広域に分布するとされるが、過去の採集記録には近似種が混同されている可能性が高く、再検討が必要。広葉樹林やスギの植林地などに生息するが、人家近くの生息地は減少しており、詳細な分類学的検討が進めば保全の対象となる可能性がある。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ニッコウヒラベッコウ *Bekkochlamys nikkoensis* Sorita & Kawana, 1983

日本固有種。殻径約10mmで、貝殻はヒラベッコウガイ (*B. micrograpta*) に酷似する。栃木県日光をタイプ産地として記載されたが、原記載以降は信頼できる採集記録がほとんどない。詳細な分類学的検討が進めば保全の対象となる可能性がある。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ベッコウマイマイ *Bekkochlamys perfragilis* (Pilsbry, 1901)

日本固有種。殻径約20mmで、殻は強い光沢があり琥珀色で透明、螺層の巻きは荒い。奄美大島から沖縄島とその属島に分布し、主に広葉樹林の落葉下に生息する。複数の近似種が混じっていると考えられ、詳細な分類学的検討が進めば保全の対象となる可能性がある。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ヤクシマベッコウ *Bekkochlamys sakui* (Pilsbry & Hirase, in Hirase, 1908)

日本固有種。殻径約15mmで、ベッコウマイマイ (*B. perfragilis*) に酷似する。屋久島の固有種とされるが、近似種との関係について再検討が必要。詳細な分類学的検討が進めば保全の対象となる可能性がある。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## カントウベッコウ *Bekkochlamys septentrionalis* (Jacobi, 1898)

日本固有種。殻径約15mmで、ベッコウマイマイ (*B. perfragilis*) に酷似する。関東地方周辺から報告があるが、近似種との関係について再検討が必要。詳細な分類学的検討が進めば保全の対象となる可能性がある。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## シコクベッコウ *Bekkochlamys shikokuensis* (Pilsbry & Hirase, 1903)

日本固有種。殻径約15mmで、ベッコウマイマイ (*B. perfragilis*) に似る。四国地方に分布するが、近似種との関係について再検討が必要。詳細な分類学的検討が進めば保全の対象となる可能性がある。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## クリロベッコウ *Japanochlamys cerasina* (Pilsbry, 1902)

日本固有種。殻径約10mmで、螺塔はやや高く周縁に竜骨はない。本州の中部地方以北に分布するとされるが、過去の記録は複数の種を混同している可能性が高く、近似種との関係についても再検討が必要。本種を含む *Japanochlamys* 属は外見で区別の困難な種が複数含まれており、詳細な分類学的検討が進めば保全の対象となる可能性がある。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## カズマキベッコウ *Japanochlamys decens* (Pilsbry & Hirase, 1904)

日本固有種。クリロベッコウ (*J. cerasina*) よりもやや小型で周縁は弱く角張る。新潟県西頸城郡青海産の標本に基づいて記載されたが、原記載以降の信頼できる採集記録がなく、近似種との関係についても再検討が必要。本種を含む *Japanochlamys* 属は外見で区別の困難な種が複数含まれており、詳細な分類学的検討が進めば保全の対象となる可能性がある。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)



柄眼目 ベッコウマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ハコネヒメベッコウ *Japanochlamys hakonensis* (Pilsbry & Hirase, 1905)

日本固有種。殻径約10mmで、貝殻はクリイロベッコウ (*J. cerasina*) に酷似する。神奈川県箱根近辺に分布するとされるが、信頼できる記録が少なく、近似種との関係については再検討が必要。本種を含む *Japanochlamys* 属は外見で区別の困難な種が複数含まれており、詳細な分類学的検討が進めば保全の対象となる可能性がある。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## エナクリイロベッコウ *Japanochlamys shinanoensis* (Pilsbry & Hirase, 1904)

日本固有種。殻径約10mmで、クリイロベッコウ (*J. cerasina*) に酷似する。原記載以降の信頼できる採集記録がほとんどなく、近似種との関係についても再検討が必要。本種を含む *Japanochlamys* 属は外見で区別の困難な種が複数含まれており、詳細な分類学的検討が進めば保全の対象となる可能性がある。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ガドヒメベッコウ *Luchuconulus acuta* (Pilsbry & Hirase, 1905)

日本固有種。殻径約7mmで、周辺は弱く角張る。南九州に分布するとされるが、信頼できる採集記録は少なく、近似種との関係も再検討が必要。詳細な分類学的検討が進めば保全の対象となる可能性がある。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ハクサンベッコウ *Nipponochlamys hakusanus* (Pilsbry & Hirase, in Hirase 1907)

日本固有種。キヌツヤベッコウ (*N. semisericata*) よりも大型で、螺管の巻きは荒く、黄褐色。本州の近畿地方以北の広域から報告されているが、近似種と混同されている可能性があり再検討が必要。詳細な分類学的検討が進めば保全の対象になると考えられる。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## エゾヒメベッコウ *Nipponochlamys hokkaidonis* (Pilsbry & Hirase, 1905)

日本固有種とされるが、近隣地域にも生息している可能性がある。殻径約4mmでキヌツヤベッコウ (*N. semisericata*) に似る。北海道に分布するが、近似種との関係については再検討が必要。詳細な分類学的検討が進めば保全の対象になる可能性がある。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## シチトウベッコウ *Nipponochlamys izushichitojimana* (Pilsbry & Hirase, 1904)

日本固有種。殻径約5mmでキヌツヤベッコウ (*N. semisericata*) よりもやや大型。伊豆諸島の固有種とされるが、近似種との関係については再検討が必要。タイプ産地である三宅島では絶滅した可能性がある。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## キヌツヤベッコウ *Nipponochlamys semisericata* (Pilsbry, 1902)

日本固有種。殻径約4mmでやや平たく、殻表は光沢がなく赤褐色。本州、四国、九州にかけて広く分布するとされるが、一般に本種とよばれるものには数多くの未記載種が含まれており、再検討が必要。詳細な分類学的検討が進めば保全の対象となる可能性がある。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## タカハシベッコウ *Nipponochlamys takahashii* Kuroda & Habe, 1969

日本固有種。キヌツヤベッコウ (*N. semisericata*) に似るが、殻表は光沢が強く半透明。九州の各地から報告されているが、過去の採集記録の大半は誤同定だと思われる。確実な記録は福岡県内の2か所だけであり、現在も生息しているかは確認されていない。早急な調査が望まれる。

【参考文献】 98)

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## トガリキビ *Parakaliella acutanguloides* Kuroda & Azuma, 1982

日本固有種。殻径約4mmで、螺塔はやや高く円錐形で、周辺は弱く角張る。大阪府の岩湧山から記載されたが、原記載以降は信頼できる報告例がほとんどない。現時点では情報が少ないが、保全の対象となるべき種と思われる。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## エゾキビ *Parakaliella affinis* (Pilsbry & Hirase, 1905)

殻径約3mm、螺塔はやや高くハリマキビ (*P. habeii*) に似る。北海道に分布するが、近似種との類縁関係についても再検討が必要。分類学的な検討が進めば、保全対象となる可能性がある。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## マルキビ *Parakaliella bimaris* (Pilsbry & Hirase, 1904)

殻はほぼ球形で殻径約2.5mm、螺管はよく膨らむ。琉球列島の広い範囲から報告されているが、誤同定が多く、筆者の知る限りタイプ標本に特徴が合致する標本は近年になって採集されたことはない。近似種との類縁関係についても再検討が必要であるが、保全対象となる可能性がある。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## アワキビ *Parakaliella higashiyamana* (Pilsbry & Hirase, 1903)

日本固有種。殻径約3mm、螺塔はやや高くハリマキビ (*P. habeii*) に似る。四国に分布するが、過去の採集記録には誤同定が含まれている可能性があり、近似種との類縁関係についても再検討が必要。分類学的な検討が進めば、保全対象となる可能性がある。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## オキキビ *Parakaliella okiana* (Pilsbry, 1902)

殻径約3mm、螺塔はやや高くハリマキビ (*P. habeii*) に似る。九州から報告されているが、過去の採集記録は信頼性が疑わしく、近似種との類縁関係についても再検討が必要。分類学的な検討が進めば、保全対象となる可能性がある。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## オオウエキビ *Trochochlamys fraterna* (Pilsbry, 1902)

殻高約3mmで、螺塔は高く、螺層は細かく巻く。ヒメハリマキビ (*Parakaliella pagoduloides*) に似るが、光沢が強く、周縁は明瞭に角張る。本州の中部地方以南、四国、九州に分布し、広葉樹林などの落葉下に生息する。過去の採集記録には誤同定が含まれている可能性があり、再検討が必要。広域に分布するが、里山や平地林での生息状況が悪化している。情報が集まれば、保全対象になる種であろう。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## イセキビ *Trochochlamys humiliconus* (Pilsbry & Hirase, 1904)

日本固有種。トサキビ (*T. sororcula*) よりも小型で螺塔はやや低い。紀伊半島中部近辺に分布するとされるが、信頼できる報告例が少なく、近似種との関係も再検討が必要。本種を含む中型の *Trochochlamys* 属は各地域に固有の近似種が多く含まれており、詳細な分類学的検討が進めば保全の対象となる可能性がある。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## キイキビ *Trochochlamys kiiensis* (Azuma, 1960)

日本固有種。殻高約4mmで、螺塔は高く円錐形で周縁は角張る。紀伊半島南部に分布するとされるが、近似種との関係については再検討が必要。本種を含む中型の *Trochochlamys* 属は各地域に固有の近似種が多く含まれており、詳細な分類学的検討が進めば保全の対象となる可能性がある。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ヒメオオタキキビ *Trochochlamys lioconus goniozona* (Pilsbry & Hirase, 1905)

日本固有亜種。オオタキキビ (*T. l. lioconus*) よりも小型で周縁はやや角ばる。伊豆半島近辺に分布するとされるが、信頼できる報告例が少なく、近似種との関係も再検討が必要。本種を含む中型の *Trochochlamys* 属は各地域に固有の近似種が多く含まれており、詳細な分類学的検討が進めば保全の対象となる可能性がある。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## イヤヤマキビ *Trochochlamys monticola* Kuroda & Abe, 1980

日本固有種。殻高約4mmで、螺塔は高く円錐形で周縁は角ばり、トサキビ (*T. sororcula*) に酷似する。徳島県近辺に分布するとされるが、近似種との関係については再検討が必要。本種を含む中型の *Trochochlamys* 属は各地域に固有の近似種が多く含まれており、詳細な分類学的検討が進めば保全の対象となる可能性がある。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## オキノクニキビ *Trochochlamys okiensis* (Pilsbry & Hirase, 1908)

日本固有種。殻高約4mmで、螺塔はやや高く円錐形で周縁は角ばる。隠岐の島の固有種とされるが、近似種との関係については再検討が必要。本種を含む中型の *Trochochlamys* 属は各地域に固有の近似種が多く含まれており、詳細な分類学的検討が進めば保全の対象となる可能性がある。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## オキノシマキビ *Trochochlamys okinoshimana* (Pilsbry & Hirase, 1904)

日本固有種。殻高約4mmで、螺塔はやや高く円錐形で周縁は角ばる。高知県宿毛市沖ノ島に分布するが、近似種との関係については再検討が必要。本種を含む中型の *Trochochlamys* 属は各地域に固有の近似種が多く含まれており、詳細な分類学的検討が進めば保全の対象となる可能性がある。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)



柄眼目 ベッコウマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## トサキビ *Trochochlamys sororcula* (Pilsbry & Hirase, 1904)

日本固有種。殻高約4mmで、螺塔は高く円錐形で周縁は角張る。高知県近辺に分布するとされるが、近似種との関係については再検討が必要。本種を含む中型の *Trochochlamys* 属は各地域に固有の近似種が多く含まれており、詳細な分類学的検討が進めば保全の対象となる可能性がある。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## サツマヒメカサキビ *Trochochlamys subcrenulata satsumana* (Pilsbry & Hirase, in Hirase, 1908)

日本固有亜種。ヒメカサキビ (*T. subcrenulata*) よりもやや大きく、螺塔は高い。九州南部に分布するとされるが、信頼できる記録が少なく、近似種との関係についても再検討が必要。詳細な分類学的検討が進めば保全の対象となる可能性がある。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## タンザワキビ *Trochochlamys tanzawaensis* Sorita & Kawana, 1983

日本固有種。殻高約4mmで、螺塔は高く円錐形で周縁は角張る。神奈川県山北町から記載されたが、近似種との識別については十分に検討されておらず、原記載以降の信頼できる記録もほとんどない。本種を含む中型の *Trochochlamys* 属は各地域に固有の近似種が多く含まれており、詳細な分類学的検討が進めば保全の対象となる可能性がある。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## サドタカキビ *Trochochlamys xenica* (Pilsbry & Hirase, 1903)

日本固有種とされる。タカキビ (*T. praealta*) に似るがやや大型で螺管は太い。タカキビよりも報告例が少ないが、過去の報告には疑わしいものが多く、近似種との関係も再検討が必要である。詳細な分類学的検討が進めば保全の対象となる可能性がある。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

柄眼目 ニッポンマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## エチゼンビロウドマイマイ *Nipponochloritis echizenensis* (Pilsbry & Hirase, 1903)

日本固有種。貝殻はこの類として大きく（殻高 15mm、殻径 19.5mm）、殻表の殻毛はきわめて密である。臍孔はほとんど閉じる。生殖器の陰茎付属肢は著しく細長い。鞭状器は短大で乳頭状で突き出す。富山県、石川県、福井県、近畿地方北部に分布するが、個体数は多くない。

【参考文献】 84)、93)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

柄眼目 ニッポンマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## サイコクビロウドマイマイ *Nipponochloritis occidentalis* Azuma, 1982

日本固有種。貝殻は殻高 13.7mm、殻径 18.5mm でこの類としては大型、薄質でもろい。殻毛は 60/mm<sup>2</sup> で細かい。臍孔は軸唇の反曲で大半が覆われる。生殖器の陰茎付属肢は太くて長い。原記載では鞭状器を欠くとあるが、最近の研究では痕跡程度に乳頭状の鞭状器の存在が確認された。岡山県から山口県東部に分布するが、エチゼンビロウドマイマイ (*N. echizenensis*) との関連が示唆されているので、資料蓄積による検証が必要である。

【参考文献】 4)、95)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

柄眼目 ニッポンマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## トウカイビロウドマイマイ *Nipponochloritis oscitans oscitans* (Martens, 1855)

日本固有亜種。貝殻は中型（殻高 12mm、殻径 17~18mm）で、ほぼ球形、薄質でもろい。螺層は 4.5 層。臍孔は明瞭に開き、殻径の 1/10 を占めるが、軸唇の反曲によってその一部は覆われる。本亜種は具体的にタイプ産地が確認されておらず、実態のわからない亜種の 1 つである。近年は本種群に入ると考えられる 4 亜種が東北地方を中心に確認されている。その識別は主に生殖器の形態比較でなされているが、それぞれの識別はきわめて難しく、再検討が必要である。

【参考文献】 92)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

柄眼目 ニッポンマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ヒタチビロウドマイマイ *Nipponochloritis oscitans hitachi* Sorita, 1986

日本固有亜種。本亜種は基亜種のトウカイビロウドマイマイ (*N. o. oscitans*) などに酷似しているが、生殖器の鞭状器が“くちばし状”でその基部に 2 つの瘤状突起をもつこと、陰茎付属肢が本種群の中では著しく長く伸びることで異なる。貝殻は殻高 10.8mm、殻径 14.7mm (3 個体平均)。茨城県つくば市筑波神社付近 (標高 260m) がタイプ産地である。

【参考文献】 92)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

柄眼目 ニッポンマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## イワテビロウドマイマイ *Nipponochloritis oscitans iwatensis* Sorita, 1986

日本固有亜種。基亜種のトウカイビロウドマイマイ (*N. o. oscitans*) とは貝殻と生殖器の形質の違いで記載されたが、貝殻の比較ではその識別はきわめて困難である。貝殻は殻高 10.8mm、殻径 16.5mm (2 個体平均)。生殖器の鞭状器が先端に向かって“くちばし状”に多少細く突き出すこと、陰茎鞘が膺よりも長いことなどで識別されるとされる。岩手県を中心に、秋田県、宮城県の一部から記録されているが、多数資料による検証が必要である。

【参考文献】 92)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

柄眼目 ニッポンマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## キヨスミビロウドマイマイ *Nipponochloritis oscitans kiyosumiensis* Azuma, 1982

日本固有亜種。貝殻は殻高 13.1mm、殻径 17.4mm、殻表の殻毛は 15/mm<sup>2</sup>前後でこの類として密度は粗い。臍孔は軸唇の反曲によりほとんど覆われる。生殖器の陰茎付属肢が長いこと、鞭状器が短小で、その基部に2個の瘤状突起があることが本亜種の主要標徴である。千葉県南部に分布するが、他地域の亜種を含めての検討が必要である。

【参考文献】 93)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

柄眼目 ニッポンマイマイ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## シラブビロウドマイマイ *Nipponochloritis oscitans shirabuensis* Sorita, 1986

日本固有亜種。貝殻は殻高 10mm、殻径 15.3mm、殻毛の密度が 12~15/mm<sup>2</sup>、臍孔は軸唇の反曲によって大半が覆われる。生殖器の陰茎付属肢は短小、また鞭状器も短く、“くちばし状”である。本亜種は山形県南部から福島県西部より記録されたが、多数個体によつての総合的な精査が必要である。

【参考文献】 92)

執筆者：湊 宏 (日本貝類学会)

柄眼目 ベッコウマイマイ科

LP (絶滅のおそれのある地域個体群) [新規掲載]

## 九州以北のヒラシタラガイ *Sitalina latissima* (Pilsbry, 1902)

殻径約 2.5mm の低円錐型で周縁は角張る。殻表には螺条に沿った殻皮の張り出しがある。本種は主に海岸林の落葉下に生息する。本種の主な分布域は琉球列島 (台湾にも生息する) であるが、琉球列島よりも北の地域でも本州の房総半島までの沿岸部 (九州および属島、四国や伊豆諸島を含む) に点々と生息地が確認されている。琉球列島では本種は比較的多産し連続的に分布するのに対し、九州以北では生息地が不連続で少ない。九州以北の生息地は南方系の本種が海流によって分布を北に拡大した偶発的な集団であると考えられる。このような集団は分布域の中心よりも脆弱であることに加えて、本州では海岸林の伐採 (14) による環境悪化が進行しているため、九州以北の個体群が新たに LP として掲載された。

【参考文献】 —

執筆者：上島 励 (東京大学大学院理学系研究科)

## 付属説明資料 貝類 参考文献

- 1) 愛知県, 2002. レッドデータブックあいち動物編. 596 pp.
- 2) 青森県, 2006. 青森県の希少な野生生物—青森県レッドリスト (2006年改訂増補版) —. 113pp.
- 3) 東 正雄, 1957. カドコオオベソマイマイの特殊な生殖器官について. *Venus*, 19(3-4): 163-165.
- 4) 東 正雄, 1982. 日本産ピロウドマイマイ属2新種. *Venus*, 41(2): 102-108.
- 5) Chinen, M., 1977. Land shells of Okinawa-jima and Adjacent Islands (Exclude of Truncatellidae, Assimineidae and Ellobiidae). *Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isl.*, III: 127-149.
- 6) 知念盛俊・治井正一, 1976. 伊平屋島・伊是名島の陸・淡水貝類 (予報). 沖縄生物教育研究会会誌, (19): 37-43.
- 7) Fukuda, H., 1994. The anatomy of *Cylindrotis quadras* from Okinawa Island, Japan and the subfamilial position of the genus *Cylindrotis* Molendorff, 1895 (Archaeopulmonata: Ellobiidae). *J. Moll. Stud.*, 60: 69-81.
- 8) 福田 宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. *WWF Japan Science Report*, 3: 11-52+11 pls.
- 9) 福田 宏, 2000. 巻貝類 I —総論. 佐藤正典 (編), 有明海の生きものたち—干潟・河口域の生物多様性, pp. 100-137. 海游舎, 東京.
- 10) 福田 宏・小菅丈治, 2000. 巻貝類 II —ウミマイマイ. 佐藤正典 (編), 有明海の生きものたち—干潟・河口域の生物多様性, pp. 139-147. 海游舎, 東京.
- 11) 福田 宏・溝口幸一郎・鈴木田亘平・馬堀望美, 2002. 佐賀県太良町田古里川河口の貝類相—2. 追加種. 佐賀自然史研究, 8: 47-55.
- 12) 福田 宏・土田英治, 1988. リシケオトメマイマイの再発見とその分布. *ちりぼたん*, 19(3): 97-104.
- 13) 福田 宏・山下博由・藤井暁彦, 1999. 佐賀県太良町田古里川河口の貝類相. 佐賀自然史研究, 5: 45-57.
- 14) 風呂田利夫, 2000. 内湾の貝類. 絶滅と保全—東京湾のウミナ類衰退からの考察. *月刊海洋*, 20: 74-82
- 15) Gude, G. K., 1900. A third report on Helicoid land-shells from Japan and the Loo-choo Islands. *Proc. Malac. Soc. London*, 4: 191-201.
- 16) 波部忠重, 1984. 沖縄多良間島の現生及び化石陸産貝類. *しぶきつば*, (10-11): 43-47.
- 17) 早瀬善正・増田 修, 1997. 石垣島産ナギサノシタタリガイの近似種. *かいなかま*, 31(1): 1-2.
- 18) 早瀬善正・多田 昭, 2005. 愛知県産ピロウドマイマイ属について. *かきつばた*, 31: 8-19.
- 19) Higo, S., P. Callomon and Y. Goto, 1999. Catalogue and bibliography of the marine shell-bearing mollusca of Japan. Elle Scientific Publications, Osaka, Japan, 749 pp.
- 20) 肥後俊一・山本愛三, 1973. オキヒラシイノミガイ探索記. 九州貝類談話会会報, 4: 3-6.
- 21) Huang, Q., 1997. Morphological, allozymic, and karyotypic distinctions between *Neritina (Dostia) violacea* and *N. (D.) cornucopia* (Gastropoda: Neritoidea). *J. Zool.*, 241(2): 343-369.
- 22) Kano, Y. and Kase, T., 2003. Systematics of the *Neritilia rubida* complex (Gastropoda : Neritiliidae): Three amphidromous species with overlapping distributions in the Indo-Pacific. *J. Moll. Stud.*, 69(3): 273-284.
- 23) 河辺訓受, 1992. 邦産オカミミガイ類について—数種の紹介と生息環境並びに分布—. *かきつばた*, 18: 6-12.
- 24) 川口洋治, 2002. ミチノクマイマイ. 秋田県の絶滅のおそれのある野生生物 (秋田県版レッドデータブック—動物編), pp. 205. 秋田県自然保護課.
- 25) 紀平 肇・松田征也, 1990. 琵琶湖・淀川淡水貝類. たたら書房, 米子. 134 pp.
- 26) 紀平 肇・松田征也・内山りゅう, 2003. 日本産淡水貝類図鑑 1 琵琶湖・淀川産の淡水貝類. ピーシーズ, 東京. 160 pp.
- 27) 木村昭一, 1987. ワカウラツボを有明海にて採集. *南紀生物*, 29: 95.
- 28) 木村昭一, 1994. 汐川干潟 (愛知県) で採集されたナギサノシタタリガイ. *南紀生物*, 36: 75-76.
- 29) 木村昭一, 1997. 沖縄本島より採集された注目すべきオカミミガイ科貝類2種. *ちりぼたん*, 27(3・4): 71-74.
- 30) 木村昭一, 2000. 宮古島のオカミミガイ科貝類相. *ちりぼたん*, 31(3): 69-84.
- 31) 木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. *日本ベントス学会誌*, 54: 44-56.

- 32) 木村昭一・久保弘文・木村妙子・増田 修, 2006. 石垣島に生息するヘゴノメミミガイ. ちりぼたん, 37(2): 57-61.
- 33) 小林由佳・和田恵次・杉野信義, 2003. 汽水棲巻貝ワカウラツボ (腹足綱: ワカウラツボ科) の分布に関係する要因. 日本ベントス学会誌, 56: 3-10.
- 34) Kondo, T., 1998. Revision of the genus *Inversiunio* (Bivalvia: Unionidae). *Venus*, 57: 85-93.
- 35) Kondo, T. and Kobayashi, O., 2005. Revision of the genus *Margaritifera* (Bivalvia: Margaritiferidae) of Japan, with description of a new species. *Venus*, 64: 135-140.
- 36) 久保弘文, 1995. オカミミガイ科. 沖縄の海の貝・陸の貝, pp. 148-149. 沖縄出版, 浦添.
- 37) 久保弘文, 2005. ヘゴノメミミガイ. 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) - レッドデータおきなわ -, pp. 361-362. 沖縄県文化環境部自然保護課.
- 38) 久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝: 生態/検索図鑑. 沖縄出版, 浦添. 263 pp.
- 39) Kuroda, T., 1931. Three new forms of *Euhadra*. *Venus*, 3: 49-53.
- 40) 黒田徳米, 1945. キセルガヒ考 (2). 貝類学雑誌, 14: 129-144.
- 41) 黒田徳米・江村重雄, 1943. 新属アツマイマイ属に就いて. 貝類学雑誌, 13: 18-34.
- 42) 黒田徳米・丹 信実, 1936. 能登・舩倉島の陸産貝類. ヴキナス, 6: 85-88.
- 43) Kurozumi, T., 1994. Invertebrate faunas, mainly land molluscs, of the Tokara Islands, northern Ryukyus. WWF Japan Science Report, 2: 339-387.
- 44) 黒住耐二, 1997. オカミミガイ. 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料 (IV), pp. 12-17. 日本水産資源保護協会, 東京.
- 45) 黒住耐二, 1998. ミズゴマツボ. 日本の希少な野生水生生物に関するデータブック (水産庁編), pp. 4-5. 日本水産資源保護協会, 東京.
- 46) 黒住耐二, 2000. オカミミガイ科. 奥谷喬司 (編), 日本近海産貝類図鑑, pp. 816-823. 東海大学出版会, 東京.
- 47) Martins, A. M. F. and Cunha, R. M. T. P., 1992. The Ellobiidae (Gastropoda: Pulmonata) communities from a boulder shore and a salt meadow in the Sai Kung Peninsula, Hong Kong. In: B. Morton (ed.), The marine flora and fauna of Hong Kong and southern China III. Proceedings of the Fourth International Marine Biological Workshop, pp. 417-428, Hong Kong University Press.
- 48) 増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑 2 汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 東京. 240 pp.
- 49) 湊 宏, 1974. 男女群島の陸産貝類. *Venus*, 32: 99-111.
- 50) 湊 宏, 1976. 日本産陸棲貝類の生殖器の研究 VI. ニッポンマイマイ属数種の生殖器. *Venus*, 35: 27-31.
- 51) 湊 宏, 1976. 日本産陸棲貝類の生殖器の研究 VII. アマノヤマタカマイマイとタネガシママイマイの生殖器. *Venus*, 35: 83-86.
- 52) 湊 宏, 1976. 与那国島の陸産貝類相. *Venus*, 35: 163-184.
- 53) 湊 宏, 1977. 日本産陸棲貝類の生殖器の研究 X. サンインコベソマイマイとサダマイマイ. *Venus*, 36: 89-91.
- 54) 湊 宏, 1979. 日本最南端・波照間島の陸貝. 南紀生物, 21: 107-110.
- 55) 湊 宏, 1980. 宮古群島の陸産貝類相. *Venus*, 39: 83-99.
- 56) 湊 宏, 1980. 日本産陸棲貝類の生殖器の研究 XV. ビロウドマイマイ属の4種. *Venus*, 39: 123-129.
- 57) 湊 宏, 1983. コベソマイマイとその近縁種について. 南紀生物, 25: 28-33.
- 58) 湊 宏, 1983. 日本産ビロウドマイマイ属の2新種. *Venus*, 42: 44-48.
- 59) 湊 宏, 1983. 日本産陸棲貝類の分布資料3. ヤマタカマイマイ. 南紀生物, 25: 207-209.
- 60) 湊 宏, 1985. 日本産ヤマトガイ属の2新種. *Venus*, 44: 81-86.
- 61) 湊 宏, 1994. 日本産キセルガイ科貝類の分類と分布に関する研究. 貝類学雑誌 別巻2. 日本貝類学会. 212 pp. + 6 tables + 74 pls.
- 62) 湊 宏, 1999. [抄録] H. ノルドジク著 (1998): 湊 (1994) によって提唱された日本産キセルガイ亜科の分類の再検討. *Venus*, 58: 25-30.
- 63) 湊 宏, 1999. 日本産キセルガイモドキ科貝類の概説. ちりぼたん, 30: 49-58.
- 64) 湊 宏, 2001. シュリマイマイ種群とオオシママイマイ種群の種類とその分布. ちりぼたん, 32: 24-31.



- 65) 湊 宏, 2001. 大東諸島のアツマイマイ属とダイトウジママイマイ. 南紀生物, 43: 117-122.
- 66) 湊 宏, 2001. 陸産貝類. 保全上重要なわかやまの自然—和歌山県レッドデータブック, pp. 202-219. 和歌山県環境生活総務課.
- 67) 湊 宏, 2003. 和歌山県に分布するピロウドマイマイ属. 南紀生物, 45: 110-114.
- 68) Minato, H., 2004. *Aegista stenomphala* n. sp. (Pulmonata : Bradybaenidae) from Mt. Gokenzan, Kagawa Prefecture, Shikoku, Japan. *Venus*, 62: 135-140.
- 69) Minato, H., 2005. Two species of *Chamalycaeus* (Gastropoda : Alycaeidae) from Miyazaki Prefecture, southern Kyushu, Japan. *Venus*, 64: 39-44.
- 70) Minato, H., 2006. A new Camaenid snail *Satsuma (Satsuma) lepidophora* from Oshima Islet, off Kii-Nagashima, Mie Prefecture, Japan. *Venus*, 65: 259-262.
- 71) 湊 宏, 2006. 八重山諸島産キセルガイモドキ科貝類の2種. 南紀生物, 48: 50-54.
- 72) 湊 宏, 2007. 伊良部島(宮古諸島)から記録されたリュウキュウキセルガイモドキ. ちりぼたん, 38(1-2): 12-14.
- 73) 湊 宏, 2007. 八丈島のキセルガイ科貝類7種と他の陸産貝類数種の生息状況. ちりぼたん, 37(4): 186-196.
- 74) Minato, H., and Yano, S., 2000. *Chamalycaeus (Sigmacharax) nakashimai ditacaeus* n. subsp. (Alycaeidae) from the eastern region of Tottori-Pref., western Japan. *Venus*, 59: 129-133.
- 75) Nakano, T. and Ozawa, T. 2005. Systematic revision of *Patelloida pygmaea* (Gastropoda : Lottiidae), with a description of a new species. *J. Moll. Stud.*, 71: 357-370.
- 76) 野津 大, 2004. オキマイマイ. 改訂・しまねレッドデータブック—島根県の絶滅のおそれのある野生動植物—, p.196. ホシザキグリーン財団, 平田.
- 77) 大八木 昭, 2000. ミチノクマイマイ. 青森県の希少な野生生物—青森県レッドデータブック—, p.272. 青森県自然保護課.
- 78) 岡本正豊, 1995. クロヘナタリ. 日本の希少な野生生物に関する基礎研究(II), pp. 79-82, pls.,124-125, 日本水産資源保護協会, 東京.
- 79) 岡本正豊, 1995. シマヘナタリ. 日本の希少な野生生物に関する基礎研究(II), pp. 83-87, pls.,126-127, 日本水産資源保護協会, 東京.
- 80) 沖縄県文化環境部自然保護課, 2005. 改訂・沖縄県の絶滅の恐れのある野生生物(動物編)—レッドデータおきなわ—. 沖縄県文化環境部自然保護課, 561 pp.
- 81) Pilsbry, H. A., 1902. New land mollusks of the Japanese Empire. *Proc. Acad. Nat. Sci. Phila.*, 53[1901]: 545-549.
- 82) Pilsbry, H. A., 1903. Additions to the Japanese snail fauna, VIII. *Proc. Acad. Nat. Sci. Phila.*, 55: 315-319, pl.14.
- 83) Pilsbry, H. A., 1903. Notices of new Japanese land shells. *Nautilus*, 17(4): 45.
- 84) Pilsbry, H. A. and Hirase, Y., 1903. New land shells of the Japanese Empire. *Nautilus*, 16: 114-117.
- 85) Pilsbry, H. A. and Hirase, Y., 1904. Descriptions of new Japanese land shells. *Nautilus*, 17: 104-107.
- 86) Pilsbry, H. A. and Hirase, Y., 1904. Descriptions of new Japanese snails. *Nautilus*, 18: 32-34.
- 87) Pilsbry, H. A. and Hirase, Y., 1904. Descriptions of new land snails of the Japanese Empire. *Proc. Acad. Nat. Sci. Phila.*, 56: 616-638.
- 88) Pilsbry, H. A. and Hirase, Y., 1905. New land mollusks of the Japanese Empire. *Proc. Acad. Nat. Sci. Phila.*, 57: 705-719.
- 89) 反田栄一, 1978. 関東南西部のコケラマイマイとカドコオオベソマイマイの生殖器について. *Venus*, 36: 181-190.
- 90) 反田栄一, 1980. 東京都小石川植物園産オオベソマイマイ属の1新種. *Venus*, 39: 142-147.
- 91) Sorita, E., 1986. Studies on species of the genus *Nipponochloritis* Habe, 1955 from Mainly Kanto district, Honshu, Japan I. A new subspecies of *Nipponochloritis pumila* (Gude, 1902) and a new subspecies of *N. bracteatus* (Pilsbry, 1902). *Venus*, 45: 99-108.
- 92) Sorita, E., 1986. Studies on species of the genus *Nipponochloritis* Habe, 1955 from mainly Kanto district, Honshu, Japan II. Three new subspecies of *Nipponochloritis oscitans* (Martens, 1881) from Kanto and Tohoku district. *Venus*, 45: 177-185.

- 93) Sorita, E., 1986. Studies on species of the genus *Nipponochloritis* Habe, 1955 from mainly Kanto district, Honshu, Japan III. On *N. oscitans kiyosumiensis* Azuma, 1982 and *N. kawanai* Sorita, 1980, with a conclusive remarks. *Venus*, 45: 186-193.
- 94) 鈴木庄一郎, 1970. 飛島の陸産貝類について. 山形大学紀要 (教育科学), 5(1): 43-66.
- 95) 多田 昭・大原健司・早瀬善正, 2007. 近畿地方に分布するピロウドマイマイ属貝類. *かいな*かま, 40(2): 1-14.
- 96) 高田良二・波部忠重, 1991. 奄美大島土浜の貝2種. *ちりぼたん*, 22: 39-40.
- 97) 谷岡 浩, 1993. コウロマイマイ. 鳥取県のすぐれた自然 (動物編), pp. 236-237. 鳥取県自然保護課.
- 98) 富山清升・坂下泰典・西 邦雄, 2003. サツمامシオイ. 鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物—鹿児島県レッドデータブック— (動物編), pp. 407. 鹿児島県環境技術協会, 鹿児島.
- 99) Ueshima, R., 1995. Rediscovery of *Neosuccinea kofuensis* Patterson, 1971 with notes on the taxonomic position of "*Succinea*" *lyrata* Gould, 1859 and "*S.* *horticola* Reinhardt, 1877. *Venus* 54: 161-173.
- 100) 上島 励, 2007. タカハシベッコウに関する諸問題. *ちりぼたん*, 38: 110-115.
- 101) 矢野重文, 2004. シロマイマイ. 香川県レッドデータブック—香川県の希少野生生物—, pp. 372. 香川県環境・水政策課.

## 和名索引

アオミオカタニシ	NT	23	オキノシマキビ	DD	57
アカグチカノコガイ	NT	20	オキヒラシイノミガイ	CR+EN	8
アズキカワザンショウ	VU	11	オキマイマイ	NT	45
アツクチハマシイノミガイ	CR+EN	6	オマオオベソマイマイ	NT	43
アナナシマイマイ	NT	40	カズマキベッコウ	DD	52
アワキビ	DD	55	カタシイノミミミガイ	CR+EN	4
アワクリイロベッコウ	NT	36	カドコオオベソマイマイ	NT	44
イエジママイマイ	NT	41	カドバリオトメマイマイ	NT	46
イササコミミガイ	VU	14	カドバリコミミガイ	CR+EN	6
イセキビ	DD	56	カドヒメベッコウ	DD	53
イソムラマイマイ	CR+EN	9	カミングフネアマガイ	NT	21
イトマキヤマトガイ	NT	22	カリントウカワニナ	CR+EN	2
イヘヤタメトモマイマイ	NT	46	カワアイ	VU	12
イボウミニナ	VU	13	カワグチツボ	NT	24
イヤヤマキビ	DD	57	カワタレカワザンショウ	VU	11
イロタマキビガイ	NT	24	カントウビロウドマイマイ	NT	40
イワテビロウドマイマイ	DD	60	カントウベッコウ	DD	52
ウスコミミガイ	NT	29	キイキビ	DD	56
ウネナシトマヤガイ	NT	48	キヌカツギハマシイノミガイ	VU	15
ウミニナ	NT	27	キヌツヤベッコウ	DD	54
ウミマイマイ	CR+EN	8	キヌビロウドマイマイ	NT	40
ウメムラシタラガイ	NT	37	キヌメハマシイノミガイ	CR+EN	7
ウラシマミミガイ	NT	28	キバウミニナ	VU	13
ウルシヌリハマシイノミガイ	CR+EN	7	キヨスミビロウドマイマイ	DD	60
ウロコビロウドマイマイ	NT	39	クチバガイ	NT	47
ウロコマイマイ	CR+EN	8	クリイロコミミガイ	CR+EN	6
エゾキビ	DD	55	クリイロベッコウ	DD	52
エゾヒメベッコウ	DD	54	クロシマベッコウ	DD	50
エゾマメタニシ	NT	25	クロヒラシイノミガイ	NT	31
エチゼンビロウドマイマイ	DD	59	クロヘナタリ	CR+EN	3
エドガワミズゴマツボ	NT	24	ケンガイ	NT	31
エナクリイロベッコウ	DD	53	ケハダヤマトガイ	NT	22
エムラマイマイ	VU	17	コウチミジンツボ	DD	48
エレガントカドカドガイ	NT	25	コウフオカモノアラガイ	VU	16
エンシュウギセル	NT	33	コウベヒラベッコウガイ	DD	49
オイランカワザンショウ	NT	25	コウモリミミガイ	CR+EN	5
オウトウハマシイノミガイ	CR+EN	8	コウロマイマイ	NT	45
オオアガリマイマイ	VU	17	コガタカワシンジュガイ	CR+EN	9
オオウエキビ	DD	56	コゲツノブエガイ	VU	12
オオカサマイマイ	NT	39	コケラマイマイ	NT	44
オオクリイロカワザンショウ	VU	10	コシキオオヒラベッコウ	DD	50
オオシマケマイマイ	NT	43	コシタカコベソマイマイ	NT	41
オオスミビロウドマイマイ	NT	40	コシダカヒメベッコウ	NT	36
オオタキキビ	NT	38	コスジギセル	NT	35
オオタニシ	NT	23	コデマリナギサノシタタリ	VU	15
オオヒラベッコウ	DD	49	コハクオカミミガイ	CR+EN	4
オカイシマキガイ	VU	9	コハクカノコガイ	NT	20
オカミミガイ	VU	14	コベソコミミガイ	CR+EN	6
オキキビ	DD	56	ゴマオカタニシ	NT	21
オキノクニキビ	DD	57	ゴマセンベイアワモチ	NT	28

サイコクビロウドマイマイ	DD	59	ナガシリマルホソマイマイ	NT	45
サカマキオカミミガイ	VU	14	ナギサノシタタリ	NT	30
サツマヒメカサキビ	DD	58	ナズミガイ	CR+EN	5
サツمامシオイ	NT	23	ナラビオカミミガイ	VU	14
サドギセル	NT	34	ニッコウヒラベッコウ	DD	51
サドタカキビ	DD	58	ニハタズミハマシイノミガイ	CR+EN	7
サンインコベソマイマイ	NT	41	ヌノメハマシイノミガイ	NT	30
シイノミミミガイ	CR+EN	4	ヌマコダキガイ	VU	18
シイバムシオイ	CR+EN	2	ネジヒダカワニナ	VU	12
シコクケマイマイ	NT	42	ハクサンベッコウ	DD	53
シコクベッコウ	DD	52	ハコネヒメベッコウ	DD	53
シチトウベッコウ	DD	54	ハスヒダギセル	NT	34
シマカノコガイ	NT	21	ハチジョウノミギセル	NT	33
シマヘナタリ	CR+EN	3	ハチジョウヒメベッコウ	NT	38
シュジュコミミガイ	NT	29	ハナグモリガイ	VU	18
シラブビロウドマイマイ	DD	60	ヒゲマキシイノミミミガイ	NT	28
シリオレットノサマギセル	NT	33	ヒゼンキビ	NT	37
シロマイマイ	NT	47	ヒタチビロウドマイマイ	DD	59
スカシベッコウ	NT	35	ヒヅメガイ	VU	15
スナガイ	NT	32	ヒナユキスズメ	NT	19
センバイアワモチ	CR+EN	3	ヒメオオタキキビ	DD	57
ダイトウジママイマイ	NT	41	ヒメカサキビ	NT	38
タイワンヒルギシジミ	VU	18	ヒメシイノミミミガイ	CR+EN	4
タカカサマイマイ	NT	39	ヒメハリマキビ	NT	37
タカキビ	NT	38	ヒメヒラシイノミガイ	VU	15
タカチホムシオイ	CR+EN	2	ヒメビロウドマイマイ	VU	16
タカハシベッコウ	DD	54	ヒョットコイトウムシオイ	CR+EN	2
タケノコカワニナ	VU	12	ヒラオオキビ	NT	37
タシナミオトメマイマイ	NT	46	ヒラケマイマイ	NT	44
タテヒダカワニナ	NT	26	ヒラコウベマイマイ	NT	43
タネガシママイマイ	NT	42	ヒラシタラガイ (九州以北のヒラシタラガイ)	LP	60
タンザワキビ	DD	58	ヒラベッコウガイ	DD	51
ダンジョベッコウ	DD	49	ヒラマキアマオブネガイ	NT	20
チビハマシイノミガイ	NT	30	ヒラマキガイモドキ	NT	31
チュウゼンジギセル	NT	34	ヒラマキミズマイマイ	DD	49
ツシマベッコウ	NT	36	ピルスブリギセル	NT	35
ツバサカノコガイ	NT	20	ヒロクチカノコガイ	VU	9
ツボミガイ	NT	19	ヒロクチソトオリガイ	VU	19
ツメギセル	NT	34	フトヘナタリ	NT	27
ツヤカサマイマイ	NT	39	ヘグラマイマイ	NT	46
ツヤマイマイ	VU	16	ヘゴノメミミガイ	CR+EN	5
デリケートカドカドガイ	NT	26	ヘソアキコミミガイ	NT	29
デンジハマシイノミガイ	CR+EN	5	ヘソカドケマイマイ	NT	42
トウカイビロウドマイマイ	DD	59	ベッコウフネアマガイ	NT	21
トウキョウコオオベソマイマイ	NT	44	ベッコウマイマイ	DD	51
ドームカドカドガイ	NT	26	ヘナタリガイ	NT	27
トガリキビ	DD	55	ベニゴマオカタニシ	VU	10
トクノシマケマイマイ	NT	43	ホソハマシイノミガイ	NT	30
トサキビ	DD	58	ボニンキビ	NT	36
トビシママイマイ	VU	17	マキスジコミミガイ	NT	29
トリコハマシイノミガイ	CR+EN	7	マシジミ	NT	48
ドロアワモチ	VU	13	マダラヒラシイノミガイ	NT	31
ナガオカミミガイ	NT	28	マツシマギセル	NT	33

マドモチウミニナ	VU	13	ヤベカワモチ	CR+EN	3
マルキビ	DD	55	ヤマタカマイマイ	NT	42
マンガルツボ	VU	10	ヤマトカワニナ	NT	27
ミカワギセル	NT	32	ヤマトシジミ	NT	48
ミズゴマツボ	NT	24	ヤマモトミジンオカチグサガイ	VU	11
ミチノクマイマイ	NT	45	ヤンバルマイマイ	VU	16
ミドリベッコウ	DD	50	ヨコハマシジラガイ	NT	47
ミニカドカドガイ	NT	26	ヨシダカワザンショウ	VU	11
ミヤコドリ	NT	19	ヨナクニアツブタガイ	NT	23
ミヤコベッコウ	DD	50	リシケオトメマイマイ	NT	47
ミヤコヤマタニシ	NT	22	リュウキュウキセルガイモドキ	NT	32
ムシヤドリカワザンショウ	NT	25	リュウキュウゴマオカタニシ	NT	22
モリヤギセル	NT	35	リュウキュウヒラマキガイモドキ	NT	32
ヤエヤマヒルギシジミ	VU	18	リュウキュウヒルギシジミ	VU	17
ヤクシマベッコウ	DD	51	ワカウラツボ	VU	10

改訂レッドリスト 付属説明資料

貝類

平成22年3月

編集・発行 環境省自然環境局野生生物課

エコマーク認定の再生紙を使用しています。(古紙含有率 100%)